國文新副讀本　下卷

4a
810
大14

41471
教科書文庫
4
810
41-1925
20000
90685

資料室

4a
810
大14

文部省檢定濟

大正十四年十一月二十四日　中學校國語科教科書

東京帝國大學教授　文學博士　藤村　作
東京帝國大學助教授　文學士　島津久基　共編

國文新副讀本

東京　至文堂

中等教科書協會
廣島大學
教
90685

凡例

一國文新讀本は國民普通教育の正當なる任務を稽へて編纂したものである。然るに今の中學校の教育は普通教育であると共に、實際に於ては高等教育の豫備教育でもある。この二道かけた現狀は、四圍の狀況から已むを得ないものとされてある。近き將來に此の情態を脱し、それから受けてゐる諸の弊害を一掃すべき改善の行はるべしとは豫言し難い。勢、中學教科書には現狀に對應すべき適宜の處置が採られなければならぬ。本副讀本の編纂は、かくして教育界の現狀の實に已むを得ざるに出でたものである。この已むを得ざる必要に應ぜんとする點に於て、國文新讀本の缺を補はうとするのである。

一いかに現下の已む事を得ざる必要に應ぜしむべきものであるとはいへ、

無意味に古文を竝列した編纂ぶりでは、その講讀に費さるべき貴い勞力と貴い時間は餘りに物體なさ過ぎる。本書は以上の目的に添はしむると共に、國民生活に資すべき國民精神と、古文學の性質・價値との理解に適切ならしむるやうに編纂方針を定めて、書に由り人に由りて、文章の配列を行つたのである。

一此の方針の下に上卷(第三學年用)に於ては、軍記中の傑作平家物語を中心として、これに保元・平治の二物語を配し、これを以て時代精神の主流の一面を理會せしむることにした。中卷(第四學年用)に於ては、神皇正統記を中心として根强い傳統的精神を了解せしめ、時代思想の主流の他の一面に十分に觸れしめることとした。なほ徒然草抄を入れて以上二面の外に、複雜なる流の存したことを知らしむるよすがとした。下卷(第五學年用)に於ては、傳統的精神の凝結して成つた國學思想の流を汲ましむべき

擬古文を、本居宣長を始めその最も秀れた人々について集めた。

一古代文學を講讀し鑑賞せしむるには、それ等が我々の祖先の靈の表現であることに十分の敬意と愛情とを以て臨ましめ、又自然に祖先の心に浸らしめることが肝要であるが、今の若い人達の心は、それ等と可なり大きな隔たりを有つてゐるものであるから、豫め古代精神・古代文學の何物たるかに就いて一般の知識を有たしめることを利便とすることが多い。これを考へて、本書には現代學者の論說を細字に印刷して添附してある。しかも、それ等は讀本の一課として十分の効果を有ち得るやうな名家の文を採つてある。

一第一・第二兩學年用の卷を缺くこととしたのは、せめて此の二學年間は生徒をして純に普通教育の正當な目的・方針の下に活動させたいといふ編者平生の主張の存する爲である。

大正十二年十一月

編者

國文新副讀本　下卷

目次

國學と雅文……芳賀矢一……一
賀茂翁家集（賀茂眞淵）
一　隅田川に舟を泛べて月を翫ぶ序……六
二　九月十三夜宴橘枝直宅歌序……九
うけらが花（加藤千蔭）
一　泊酒舍にて蓮を看る……一一
二　秋雨……一四
三　秋懷……一六
四　山里の月……一七

琴後集（村田春海）
一　泊酒舍の記……一九
二　知足庵の記……二〇
三　隨時樓の記……二二
四　山水のかたかける繪を見て……二四
五　萩を賞づる記……二七
六　秋の山ぶみ……三〇
七　初雁を聞く記……三四
八　月にむかひて志をいふ……三七
九　雪をめづる記……三九
花月草紙について……芳賀矢一……四二
花月草紙（松平定信）

一　はしがき……四四
二　櫻……四五
三　月……四七
四　學問……四八
五　雨……四九
六　花の雨風……五三
七　月なき夜半……五四
八　日新の敎……五六
九　交友の道……五七
一〇　利害得失……五八
一一　兩頭のくちなは……五九
松屋文集（藤井高尙）

一　山口栞の序……六一
二　山館冬來……六三

閑田文章（伴蒿蹊）

一　情は新しきをもて先とす……六四
二　冬のこゝろ……六六
三　大森求古の故國に歸るに寄す……六七

檀園文集（中島廣足）

一　夕……七〇
二　夜學……七一
三　漁村……七二
四　山家の興……七四
五　書……七五

泊洒舍文藻（清水濱臣）

一　萩をめづる詞……七七
二　擣衣を聞く……七九
三　茶の詞……八〇
四　縣居翁の墓參會に……八〇
五　花に寄する祝言……八四
六　泊洒舍に蓮の花を見る詞……八八

鈴屋集（本居宣長）

一　山路の菊の物語……九〇
二　述懷……九四

玉勝間（本居宣長）

一　古書……九五

二 學問……九七
三 新なる說……九八
四 新にいひ出でたる說……九九
五 おのが物學び……一〇二
六 師の說……一〇六
七 親の喪……一〇九
八 前後と說のかはる事……一一〇
九 あやしき事……一一二
一〇 歌と文……一一三
一一 道のひめごと……一一四
一二 學問はその道をえらぶべし……一一六
雨月物語（上田秋成）

菊花の約……一一七
駿臺雜話（室鳩巣）
一 杉田壹岐……一三三
二 月は世々の形見……一三八
三 壬子試筆の詞……一四三

目次終

國文新副讀本 下卷

文學博士 藤村作
文學士 島津久基 共編

國學と雅文

芳賀矢一

釋契沖が僧侶にして、其の得たる悉曇學の知識より國語の研究に入りしは、學問が僧侶の手を離れ行きし、時代の經過を語るものと見るべく、稻荷山の神主荷田春滿が國學を主張せしは、家學當然のことと稱すべしと雖も、國學校を起さんとする啓文のなほ漢文にて書かれたるは、時代なほ之を至當とせしを察せしむるに足る。賀茂眞淵が徂徠の學派に影響ぜられながら、國文を以て徂徠たらんと欲したりしは、國學者が純國文を以て

漢學者の漢文に拮抗せんとせし初なるべし。

眞淵の門流は頗る盛んにして、古史・古語古文、あらゆる方面に於て復古的運動・研究をなすものの輩出したりし中に、本居宣長は漢文の日本書紀を棄てて、國文の古事記を採り、畢生の大事業として其の註釋書を作りぬ。古事記傳既に成りて、宣長の京都に入るや、公卿・縉紳爭うて其の門に集り、國學の興隆は正に其の頂點に達したり。眞淵・宣長は日本の神話及び歷史を基礎として、日本の國家を以て世界萬邦中に最も優れたるものと考へ、日本の五十音を以て完全なる音韻となし、支那の文化の早く開けたるを以て、寧ろ其の民族の狡猾怜悧の致す所となし、百事日本を中心とし、日本の古代を尊崇して、支那を尊ぶものを嘲り、漢學者を罵りたり。その說多少の獨斷偏見なきに非ざれども、論斷多くは古代の文獻に據り、考證の根據あり。神代以來の國風國俗を以て儒教に代へんとし、眼中にはまた儒學者なかりき。儒教の上下を風靡し、漢學の唯一の學問と見做されたる時代に於て、國學は眞にその一敵國たる觀を呈するに至りぬ。

宣長が歿後の門人たる平田篤胤に至りては、遂に一種の神道を樹立し、古來の碩儒高僧が一人も非議せしことなき釋迦も孔子も皆これを罵倒し去りて、半文の價値なきものとなしぬ。此の如きは寧ろ上古以來儒佛の影響を受けて發達し來れる文化を無視するに均しけれども、外國船舶の頻りに我が邊海を覗ふ時世の切迫が、尊皇愛國の精神を一層亢奮せしめたる結果と稱せざるべからず。儒教を中心としたる尊皇論も、神道を主とする愛國論も、皆時世の刺激によりて次第に激越の調子を帶び來りたり。かくて漢學者と國學者とは相協力して、遂に倒幕の氣運を促し、明治維新の變革を見しめたりといふべし。德川氏が幕府を開きし當初文教を奬勵せしは、戰國亂離の弊に鑑みて、倫理の教を以て武士の節義を維持し、階級的秩序を維持するに供せんとするにありき。然れども學問の進歩と時世の影響とは文教の力を以て遂に德川幕府を顚覆するの結果を

生じたり。殊に副將軍として、德川親藩中の親藩たりし水戸家が其の發頭人たりしは、天の配劑の頗る巧妙なるを感ぜしめずんばあらず。

然れども、飜つて考ふれば、德川時代の昌平三百年、文教大いに興りて、國民が自發的に明治維新の大業を成すに至りしは、眞に國家の慶事なりき。戰國亂離の末、伴天連の宣教盛んなりし頃は、國民皆文盲にして、國史を知らず、國文を知らざりき。今よりしてこの時代を思へば、寒心すべきもの甚だ多し。德川氏の鎖國三百年間に於ける學問の興隆は、よく我が國民をして、今日の生存競爭に堪へ得べき智力を準備せしめたるものといはざるべからず。國學者の文は、純國語を以てし、上古・中古の語彙により、古文を模範として綴られたり。これを稱して雅文といへり。雅文は即ち擬古文なり。眞淵は古學を喜び、古道を尊びし結果として、奈良朝の言語・文章を標準として、雅文及び和歌を作れり。彼の門下には擬古の能文家多く出でしが、就中村田春海・加藤千蔭最も名高し。その他國學者を以て

自ら任ぜしものは、律令・法令の研究家たると、言語・文章の學者たるとの別なく、必ず和歌を作り、雅文を綴らざるなし　而して大抵は中古時代を宗とし、源氏物語・枕草子等を以て標準とせり。由來古代の單純僅少なる語彙を用ひて、進歩せる社會の複雜なる事物・思想を叙述せんことは、至難の事たるを免れず。漢學者が強ひて漢文を作製して得々たりし愚と同じく、これはた國學者の其の好める所に僻したるものといはざるを得ず。

但し國學者の雅文は、古代の事物を叙述したるものに非ざれば、花鳥風月の風流事を述べたるものなれば、大なる不便を感ぜざりしが如し。

摸倣文學は原文學を凌駕すること甚だ難し。藤井高尙は雅文を以て最も得意とせし人にして、其の文章流麗誦すべしと雖も、軟弱纖麗、平安朝女流文學の亞流たるのみ。石川雅望の奇才は、都の手ぶり等に、よく當時の俗事を寫し得たりと雖も、これ唯古語を用ゐて今代の事實を描寫し得たる摸倣擬古の技巧を示したるに過ぎず。上田秋成は國文家にして小說

家たりし人、その作雨月物語・春雨物語の如きはこの種の作品中の最も優秀なるものといふべし。

國學者は常に古語を用ゐて古文を作ると稱し、務めて漢語・漢文を排斥すと雖も、よくその擬古文を點檢すれば、句章の排列・順次、若しくは引喩の方法等、當時の漢文に負ふ所尠からず。其の文題の如きも、何々亭の記といひ、何何送別序といひ、漢文の體を學びたるもの多し。これ當時の雅文が單に中古文の摸倣たるに止らずして、別に一種の生氣を保てる所以なり。この知らずの中に受けたる漢文の影響なくば、雅文は一層價値なき純なる中古文の摸倣に終りしなるべし。（國文學歴代選に據る）

賀茂翁家集（賀茂眞淵）

一　隅田川に舟を泛べて月を翫ぶ序

何時はあれど、照る月の秋のさかり、何處はあれど、行く水の隅田川に、夕波のふた國かけたる月見んとて、唐・大和の文人、絲竹にしも堪へたるを列ねて浮ぶることあり。舟は潮のまに〳〵棹ならずしてのぼり、岸は舟のまに〳〵居ながらにしてぞうつる。岸遙に晴れて、百の臺に簾を卷き、風靜かに吹きてちぢの舟の帷を動かせり。或は陸、或は舟、或は高き、或は卑しき、吳の舞妓、高麗のわざをぎ、色は波に匂ひ、聲は空になんすみにける。是やこの葦荻を分けつる國にかあるらん、都鳥にこと問ひける河にぞあるらし。時のゆければ、かゝる都にしもなりにける事を、或は目に喜び、心に驚き、或は醉泣きして、今をほめ、歌しのびして、いにしへなん語らひける。時に或人のいへらく、「我が朝に隅田川といふ河こそおほけれ。うちよする駿河なる、大鳥の出羽なる。この武藏なるは、いにしへの言の

是やこの葦荻を分けつる國　更科日記に出てゐる

都鳥にこと問ひける河　伊勢物語に出てゐる

いにしへの言の葉の集

古今集
後の道行き
ぶりの日記
更科日記

葉の集には、下總のあはひと書かれ、後の道行きぶりの日記には、相模のさかひなりとぞ記しける。いでや、月待つ程の慰めに、人々この事さだめ給はんなり。」といへば、有るが中に一人あげつらふ事は、「それ古の集は、後の人の筆を加へたるあり、後の日記は野らに問ひて記す事あれば、よるべき物の、なづむべからざるをや。抑、葦荻を、や分けつらん、都鳥にやこと問ひけん。葦荻は人ぐさしげからんさがにして、鳥の名は、都とならんしるしにぞありけらし。しかあれば、かゝる都の内に流るゝ川をしも、絶えせぬ時代の例にも引き舊りにし名どころのよすがにもいふべきなりけり。」と、言ひをはれば、待ちとりて、物の音をわなゝかし、澄みのぼる月に嘯き出でたる、孰れの所かはしかん、何時のときにかは忘れまし。すなはち舟こぞりてかしこければ、今宵のありさま述べ盡くすべし。ただ我ひとり醉ふ。かゝれば、何の心をかいはん。

渡つ海の夕汐のぼる隅田川
月の空まで舟もゆかなむ。

二　九月十三夜宴橘枝直宅歌序

亭子の御門
宇多天皇
中御門の右
の大臣
宗忠といふ。
ふみは中右記
をいふ

秋の夜の長月十三日の夜の月をめづることは、ことさやぐ唐國にはあらで、そらみつ大和の國ぶりになんありける。その始を問ふに、昔亭子の御門の、今宵の影の異なるをしも、中の秋につぎなんものと見そなはし給ひ、定めのたまはせけることを、中の御門の右の大臣、保延の初めのけふのふみにぞ記しおき給へりける。しかあればそれよりこのかた、茜さす大宮より天さかる鄙のきはみまで、高き卑しきめであへることになんなりにたる。それが中に、

あやにくの浮雲を怨み、しくめる波風をわぶる折しもあるを、ことし延享はじめの年、いとど御世の秋風靜かにして、此の二夜の月には、稻葉の雲のとしあるよろこびのみありて、寶の鏡の隈なす塵もすうるわざなきに、わきて今夜しも、いよゝ桂の花の光も勝りてなん覺えける。　こゝに橘ぬし、今宵あるじせらるれば、おもふどち來り集ひて、盃度々めぐらし、言の葉數々となふめり。　さるは此のぬしのうみの子、ことし十といふ齡にして、三十あまりの言の葉をぞつらぬなる、こよひしもいとゝく詠みいでられたり。　これは吳竹の世にめづらかなることなれば、唐・大和の言の葉にかけて、且は宿の橘の花さへ實さへあるたねを思ひ、かつは霜雪にもいや常磐ならん生ひさきを祝ひほめざるはなし。　またかゝるさやけさは、人々の百よの秋の行末にはいくそたびかあらん。　己が世の三十・四

橘の花さへ實さへ
橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜置けどいや常磐の木（萬葉集）

史記「鄭以二子產一爲レ相三年。門不二夜關一。道不レ拾レ遺。」

十のこしかたには、未だ見ざりけりとなん言ひあひつゝとざさぬ今の御世にあひて、心さへ隔てなきまとゐを喜び、あるはめでさせ給へる舊き御時の始をしも、仰ぎまつるなりけり。　ただ此の折にありて、秋の夜の長きにあえぬ言の葉の心の短きをなん恥ぢぬる。その詞にいはく、

めで初めしその長月の今宵もや
こよひばかりの光なりけむ。

うけらが花（加藤千蔭）

一　泊洌舍にて蓮を看る

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水の畔

にさざなみや滋賀さざれ浪もて名をおほせたる屋あり。白妙の富士のみ雪も消え、あらがねの土さへ裂くといふなる頃、人皆涼みせんとて其の宿りに集ひて、高き屋に登りて見渡せば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲き滿ちたるにてはありける。生ひ立てる葉の廣ごりたるは、宮路ゆくうま人の衣笠の如く、浮きたるは、大庭に百の官のわらふだ敷き竝べたる如く、葉に置ける露は、白玉の五百箇つどひを解き亂したるになん似たりける。池の水清らかに澄みて、遊ぶいろくづ思ふことなげなり。人々衣の紐を解きさけ、欄干に倚り居て酒汲みかはす程、彼の岡の、木高かる瑞枝吹き越す風の涼しきに、えならぬ香の薫り來るも、たとしへなしや。彼方の岸より中島まで、長き堤を築きて、石もて作れる橋かけ渡せるは、唐土の西の湖とかやいふめる處のさまかけるかたに似通ひて、遙に行きかふ人の袖の匂さへ懷かしく見ゆ。あるじは、吾が國ぶりの歌つくり、書見ることをしも好めるが上に、こと國の書をさへに、朝夕の友とせりければ、さる方の友垣にしも乏しからず。唐歌好める何がしの博士は、さ丹塗りの小舟に唐をとめ載せて、此の花折らせまく思ひ、日の入る國のますらをの法に心を寄するは、これぞこの上の品のうてなに生れ出でたらん心地するなど言ひあへりけり。人々、心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで住む人の
　　友と見るべきはなぞこの花。

かくて、上野の岡の入相の鐘、木の間しのぎて響き渡れば、み盛りに開けたりし花の、またふゝめるさまに立返りたるも、哀れ深かるものから、遠方の梢の鶯すら塒求むるものをとて、人々あがれ歸りぬ

西の湖　支那浙江省に在る西湖

二　秋雨

葉月二十日餘り、秋のけはひの懷かしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に往きて宿りぬ。有明の月の匂も、霧たち渡る曙のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なん、殊に哀れは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ち初むるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろ〳〵と散るも哀れなり。水の面は動くともなくて鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋は、さしひく汐にも交らで、とはに縹の色に流れ去にて沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならん。打向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの

如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、其のひま〳〵より長き堤の見え渡るに、堤のをちなる梢は、やう〳〵に薄墨もて書きけちたらん如く、いとしも遙けきは、ただ靡かぬ煙とのみぞ見ゆる。此處彼處より鴉の飛び行きつゝ、塒の鷺の翼重げに起き出でて、河の瀨の眞菰に下り立てば、鴉の群れ來て水の面に浮べるもをかし。上つ瀨より、筏師の蓑笠きて棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて思ふ事なげにてをり、筏は水のまに〳〵流れ行くも靜けし。渡り守舟さし出せば、大笠傾けて渡り行く人の、やがて堤を歩くさまも繪によく似たり。凡て一日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も、長き堤も、あるは現れ、あるは隱れて、限りなき青海原に向ひたらんやうに覺ゆる折もありけり。

かくてやゝ夕暮近くなり行けば、群鳥のおのがじし塒もとむるに、雁の一つら二つら渡り行くなど、えもいはん方なし。暮れ果てても、猶も行く水の色のみ遠白く殘りて、河ぞひ小田にいはへるみくまりの神の御火の、海人のいさり火ともいふべく、幽かに見え渡るも哀れなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川、
たが墨がきのすさびなるらむ。

三　秋　懷

秋の夕暮を哀れなる時の限りにはいふめれど、なほ朝の景色こそこよなけれ。夜いたう更け渡りて、軒端の荻の風も靜まり、叢の蟲の音も弱りはてぬ。長々し夜の明くるを待ちわびて、遣戸引き明

けて、やをら見出せば、野らとなりぬる庭の淺茅に置きわたしたる露は、ま白に見ゆるものから、雪にもあらず、霜にもあらで、おのづから光を含み、置くが上にいや置き添ひて、處せうこぼれもあへぬに、薄霧を洩るゝ有明の月の露てふ露をとめて、はかなげに影をうつせるを見れば、何時となく袖にさへこぼれかゝれり。こゝらありし世には、憂き事もありつれど、また嬉しきふしにも、樂しき事にも、あまた遭ひぬるを思出ぐさにて、とはに心を慰むるものを、なにかく涙の落つるならんと、我ながらあやしう。

有明の月影うつる白露の
などかくばかり身にはしむらむ。

四　山里の月

秋こそ殊に　山里は秋こそ殊にわびしけれ、鹿の鳴く音に目をさましつゝ（古今集）

耳に鳴り弭の音を聞かず、目に旗手の靡きをも見ぬ御時世に遭ひては、何事につけても、憂しと詫びしと怨みかこつべき事やはある。されば世を避くとしもあらねど、あきじこる市の巷に近き賑はゝしさを厭ひて、この山里には移ろひ住めるになんありける。「秋こそ殊に」といへる宜なるかな。籬の下にたゝずめる小鹿、松に木傳ふ猿の聲も、獨りある人を慰むるに似て哀れなるに、茜さす日も入りはて、杣人の斧の響絶えて、端山のかひより月さし上れば、そがひの峯より落つる瀧つ瀬は、黄金の色の絲引きはへたらん如く、岩に碎くる水は、白玉をこき散らすかとぞ疑はる。とこしへに清らかにして物に滯ることなきを我が心とはせんと思ふに、たぐへてんものは何ぞ。ただ月と瀧つ瀬とのみ。

琴後集（村田春海）

一　泊洒舍の記

あるじ　清水濱臣

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を萱のまちとぞいひける。こゝに蘆原かりそけて、ついたてたる伏屋あり。そはただに其の池に臨みたれば、名をさざなみのやとなんいふなる。そもそも霞たなびく春のあしたは、むかつをの梢を映して花のかがみに對ひ、雁鳴き渡る秋のゆふべは、雲間のかげを浮べて月のみ舟をとどめ、あるは蓮花咲く夏の日、あるはみ雪降る冬の夜、をりにつけ時に從ひて、見るめのあはれなん盡きざりける。あるじは深くみやび好める人にて、四つの時のあはれを過ぐさず、こをいにしへざ

まの言の葉にのばへて思をやり、また唐土ぶりのしらべにならひて心をも慰めけり。かれ、たまあへる人々、花にあくがれ月にたどるも、つねにこの伏屋をなん問ひ來にける。一日あるじのいひけらく、「世を經て絶えざるものは鳥の跡なり。いで此の屋のたのしみをも、人々とあひむつばへる心をも、永くうみの子のつぎ〳〵に傳へて、わが名代とせん。ことのゆゑよししるしてよ。」とあれば、すなはち筆さしぬらして、いゝかもののはしに書きつく。寛政といふ年の七とせ神無月。

二　知足庵の記

あはれ、世のならはしこそはかなきものはあなれ。たかき賤しき品いとことなりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、ただ足はぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢のあらしを恨み、月をめづるとては尾上の雲を厭ふためし、誰かはのがるべき。「林に宿るさゝぎは僅かなるさ枝のかげをのみたのみ、流に水もとむる鼠は唯渇をとむるに過ぎず。」とこそ、いにしへ人もいひつれ。かゝることわりをだにわかたば、限りあるこの世に、限りなき事を思ふべきかは。こゝに中村のぬしなん、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松のとぼそに心の月をすましめ、花をつむゆふべ、閼伽を汲むあかつき、み佛につかふるいとまある時は、氷を碎き雪を煮て、栂の尾の昔をしのぶめる業にしも、心をなん慰めける。これや此の世に求むべきすぢをも忘れ、また人を羨むべきふしをも思はで、おのが心からこと足る業にしもあれば、かのいにしへ人のいひけんことわりにこそかなはめ。いでや、うつそみの世の、限

林にやどる云々
鷦鷯巣二深林一不レ過二一枝一、偃鼠飲レ河不レ過二滿腹一。（莊子）

栂の尾の昔云々
京都栂尾の明慧上人が茶の種を得て栂尾に植ゑた事がある。

りなきもとめあるきはとは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべなうべな、この住家をしも足ることを知るとは名づけしこと。

三　隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさまざまなれど、時にそむき折にあはで、つきづきしからざらんは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば、夏の日は埋火の煖かなるを思はず。冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。いにしへの人も、春の網代、八月の白襲をこそ、すさまじきことの例には引きいでたりけれ。かゝればはかなきすさみも、折にあひたるはをかしく、見所なき木草も、時を得たるはめづらかになんおぼゆめる。し

いにしへの人　清少納言春の網代云々　枕草子のすさまじきものの項に在る。

かはあれど、人ぐさしげき巷の、所せく門立並べたらんあたりには、時を過し、をりを失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山遙にて、四つの時のゆきめぐるに隨ひて心をやるべき住居は、いともいとも難しや。こゝに前田のぬしの高殿こそ、あやしく所得てはおぼゆれ。後へは市路につづくものから、前は世離れたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりをゐながら袂にしめ、夏はみなぎは清き池の蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月に嘯き、冬は雪に歌ふも、すべて山水のあはれを添へざる折なんあらざりける。ましてあるじの言の葉もて友にまじらふことの廣ければ時、にふれをりをすごさず訪ひくる人々、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへにあく世も知らぬ高殿なればとて、聞中大德のことさらに、時に隨ふてふことをもて名づけられたるは、ふ

かき心しらひにこそありけらし。

四　山水のかたかける繪を見て

空蟬の世に、人のことわざ多かめれど、靜けき窓のうち、幽かなる燈火の下に獨り居て、よくつれづれ慰むべきものは、ただ畫と書との二つになんありける。　絲竹のしらべに思ひをやり、盃を取りてうき世のさまを忘るゝたぐひは、折にふれ時にしたがひて、人の心を慰むるわざなれど、いかでかは常にしもなすべき。　かれ下れる世に生れ出でて、上つ世の人を心の友となすべきは書なり、うつし繪のたくみになんありける。　かゝれば、古の書どもくりかへし見る暇には、名だたる山川のけはひを、うつしゑにしのび出でて、こを常に心やりぐさとぞなしける。　かくおのが心を思ひはかりて、或人

かしこかる世の云々　李白の蜀道難の詩をいふ

の見よとておこせしを見るに、山を疊めること十まり五つ、ただ墨がきにかきなしたるが、濃きは近く薄きは遠し。　そのま近く見渡さるゝは大木繁く生ひ立ち、巖こゝら聳えて、道いとさかしともさかしく、かしこかる世の經がたきためしにいひけん、からうたの心こそおぼゆれ。　また遠く見やらるゝは、あるかなきかに雲霧立迷ひて、群れゆく鳥の翅も、末ただきえぎえなるに、夕日ほのかに匂へり。　古の書に眉びきの如しといひけんは、唯かくぞとまづ想ひ出でぬ。　水の流一すぢ、その源をとむるに、幾千里の遠ともわかたず。又その落ちゆく末を望めば、何處をはかとも知り難し。　その八十瀨の隈には、眞砂いと清らに、さゝら波よる渚あり。　また、岩うつ波高く立ちて、音聞くばかりなるに、舟いたくさしわづらへるあり。　また、岸のまに〳〵入り曲りて、水淀みて深きは、そこひも知らぬ淵

なるべし。

さて、水を隔てて、麓の方に、大きなる屋ども甍を連ね、ことごとしき門押開きて、前には石を橋とせり。又水の此方には、あやしき萱屋立並びて、おどろなる垣根結ひわたせり。又こゝかしこに人あり。あるは馬に騎れるも、あるはかちより行くも、あるは薪負へるも、あるは釣の竿もたるも、立ちたるも居たるも、老いたるも若きも、そのさま言ひも盡くしがたし。まして、木草何くれのものは、數へもあへんかは。かくとほしろき山川の姿を、ただ一ひらの紙の中に、こまやかに心しらひしたるは、世になき筆の跡とぞいふべき。ただかく珍かなるを、いづくの國、いづくの處を、いつの世いかなる人のうつし置きけるなりとも、知られぬこそ惜しけれ。これに對へばあからめもせずうちまもられて、あくよなけれど、さはいへ、久しくとどむべきならねばとて、そのおほよそをしるし置きて、返しやりつ。

五　萩を賞づる記

老いては物の興少き習なるに、いとど病勝ちなる身の、萬に物憂くて、たれ籠めてのみ日を經るを、或人のまうで來て「萩もやゝ盛りになりぬ。などか野べ見にとは思立たざる。彼所の御寺、此所の園生など、とりどりに人もあくがれ行くとぞいふなる。いざたまへ。斯くてのみやは。」など唆かせば、さすがに心は動けど、「徒歩より行かんさかひは、杖曳く程も遙かなるべく、又餘りに人目繁からんも、むつかしかるべし。」といらふるを、「いざや、我が誘ひ參らするはさる方ならず。君も知りたまふらん、隅田川を遡ること幾何もあらで、入

りぬる磯に棹さしとどむる所なり。」と言へば、「さりけり、さりけり。そは我も訪ひなれたる宿ぞ。さるは人の往來の少き邊にて、舟路の程もただならぬを。」とて伴なひ行く。舟より下るれば、白髮の森を左に、秋葉の社を右にて、秋の景色なか〳〵に世離れて見ゆるもをかし。門さし入れば、主人喜びて迎へ出づ。み肴には何よけん、鮑さだをにはあらぬ、芋・蓴菜等所につけたる物調じ出でてあるじしたり。酒たうべつゝうち眺むるに、はたばかり廣き庭を、いくむらの錦を敷きたらんやうに、植ゑわたしたるは、いと見所あり。此の萩は宮城野の種なりとぞいふ。げに花房大きやかにて長く垂れたるは、よのつねの匂ならず。

さを鹿も、誘はれぬべし宮城野の
秋をば此處に移し來にけり。

み肴には
み肴には何よけん、鮑さだをかかせよけん
（催馬樂我家）

主人に杯さすとて、

いざさらば袖匂はして秋萩の
一花ごろも着てや歸らむ。

返し

幾度も露分けごろも着てを見よ。
など一花に思ひ置くらむ。

ある人

花にそむ心ぞあかぬ夕かけて
われもひもとく萩のあそびは。

また主人

暮れぬとも家路な問ひそ秋萩の
色なる露に月や宿らむ。

夜の錦にはなさじと思ふ主人の心ばへも、立たまく惜しき夕にな
ん。

六　秋の山ぶみ

都の旅居の久しう程經るまゝに、自ら住み馴るゝ心地のせられて、今は睦じう語らふ人々も多かるが中に、年頃心合ひたる法師の法輪にあるが許より、「秋もはや殘少うなりにて侍り。山かたづけるあたりは、露霜の色も隈なう侍るを、あな心遲き主かな。」と唆されて、時雨の雲と共に誘はれ行けば、あるじは待ちに待ちたるけはひしるくて、御堂の東の廂搔拂ひて、「此處に少時休らひ給へ。先づ山ぶみのまうけせん。」とて、破子なにくれの物などとう出て、のゝしり合へり。「いかでさはあわただしうは物し給ふぞ。世にかゝづらふ

法輪　嵯峨に在る寺眞言宗、太秦廣隆寺に屬する

事もなき身にし侍れば、一日二日は猶此處に在りて、高嶺の秋の匂も心靜かにこそ尋ね侍らめ。」と言へば、「うたて、さはな宣ひそ。山の嵐はただ時の間もうしろめたきを、あへなく夜の錦になし果て侍らば、いかに口惜しからまし。いざたまへ。」とて伴なひ出づ。しぼちの年まだ二十には足らぬばかりなる一人、はしたなるほどの童に、かの調じたるものなど擔はせたり。「今日は常の道にもよらじ。ただ梢の色をのみしるべとせん。」とて、木こり・總角が踏分けたる跡を尋ねて、下照る蔭を慕ひ行けば、所せき木の根・岩角などの、いと歩み苦しきを、辛うじて少し平かなるかたそばに出でぬ。こゝは木立も疎にて望も隈なければ、苔の席に下りゐて見るに、げにも高嶺の方は、ただいくむらともなく錦を張りたらんやうにて、日影に輝きあひたる目もあやなり。麓を見れば、大井の河遠く流れて、縹の

布ひき延へたらんやうなるに、散り浮べる木の葉は、紅のゆはた晒せるが如し。「彼の見ゆる向ひの山の殊に色濃きは。」といへば、法師の言ひけらく、「これなん小倉の峯なる。古は中務の親王のかくれがしめ給へることも聞え、また彼の定家のまうち君の、『きのふはうすき。』と詠み給ひけんも彼處にて侍れど、今はいづれも其の跡とてはさだかにはえ知られはべらず。又二尊院とて尊き御寺のはべるは、法然大德の跡とどめ給ひけるより、今にその名殘忘れず。」などいふ。「さるは哀れなる御物語にも侍るなり。古き世を語るにつけても、この流の遠き昔を汲み侍れば、かの延喜の帝の秋の行幸の事こそ、折柄殊に慕はしう覺え侍れ。そのかみ名高き歌人皆諸共に參りて、みことのりのまに〳〵歌ひ出でたる言の葉どもの、秋の錦にも劣るまじう侍りつるは、たとしへなうをかしうこそ侍りけ

きのふはうすき
小倉山しぐるる頃の朝な朝な昨日はうすき四方のもみぢ葉（拾遺愚草）

め。物變り時移ろひ行き侍りぬれど、唯この山河の昔に變る世もなければ、今も目の前に見る心地のし侍る。」などいふを、傍なる童の聞きて、「この汀の松のいとどし深く見ゆるは、古きみゆきの事とひけむは、此の木にはあらずや。」などいへば

みゆきせし昔の秋をいかにぞと

またも入江の松にとはばや。

と歌ふを、法師の聞きて、「松にのみやは問はん、嶺の紅葉も心ありげに見ゆるを。」とて、

小倉山いまもみゆきを待ちがほに

峯の紅葉ぞにほひことなる。

と言ひつゝ、土器とうでて酒たうべなどす。彼の新發意も、人なみに物言はんとにやあらん、から歌一つ口ずさみ出でたれど、まだか

汀の松
大井川かはべの松に言問はむかゝるみゆきやありし昔を（拾遺集）

たなりなるが、文字の聲打合はねば、茲には書かず。かくて日影やうやう傾き行きて、夕を告ぐる鐘の音遙に聞え來れば、猶分け見ましき方も多かれど、打連れて御堂に歸りぬ。ただ今日の山ぶみの猶飽かぬ事など言へば、あるじの「我もさこそは覺ゆれ。明日は大井より船さしのぼせん。」とあれば、「さらば、となせの紅葉をも見ばや。」などいひて、其の夜は寐ぬ。

七　初雁を聞く記

秋のけはひの移ろひ行くまゝに、野面の住居ぞ言はん方なくをかしき。そともの小田の穂なみは、かつがつ色づき初めて、籬の下の小萩は、折得顔に綻び渡れる、露の匂、風の音なひ、いづれ哀れを添へざるなんなかりける。さるは夕月の面白きを、ただにやは過ぐさんとて、蓬生の露打拂ふなるは、我がたまあへる人々なりけり。伊豫簾高う捲けば、村雨の名殘の雲は絶間勝なるに、そこはかとなき外山のたゝずまひも、月影にもてはやされて、やう〳〵現れ行きぬ。

山を望めば云々
望山幽月猶藏影、聽砌飛泉轉倍聲。（和漢朗詠集）

荻の上露云云
鳴き渡る雁の涙や落つらむ物思ふ宿の萩のうは露（古今集）

霞みて去にし云々
春霞霞みて去にしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に（古今集）

「山を望めばかすかなる月。」と口ずさみ出づれば、折しも峯飛び越ゆる一つらの聲さだかなるは、この麓田に落つるなるべし。「げに萩のうは露もただならず。」などいひしろふほどに、一人がいひけらく、「霞みて去にし、雲路の名殘なく覺えしを、秋霧の上に聲聞き初むるが、よに珍かなることは、更にも言はじ、凡て四つの時、花鳥の色香に添へてはかなき言の葉をのばへ、すずろなる心を動かしつべきくさはひ多かるなる中に、世を怨みては人の心の秋を悲しみ、憂きを歎きては、中空の物を思ひ、雲水に身をたぐへては、此の世をかりと辿るも、折にふれ事につけつゝ、哀れさ似る物なくこそ覺ゆれ。いでや

今宵の慰めに、このくさぐさの心によそへて、各、ことのばへ給はんなり。」とあれば、澄み昇る月影に對ひて嘯き出でたるは、心々の引くかたなるべし。

世を秋となきて過ぐなる初雁を
わが身のよそに聞きやはつべき。

となんあるは、世をあぢきなく思ふ方あるにや。

旅衣幾たび秋をかさねまし
また初雁の聲を聞きつゝ。

こは故郷を忘れぬ人なれば、

かりがねのおくれ先だつ一つらを
定めなき世のたぐひとも見む。

法師めきたる口つきやと、人々いひあへり。

八　月にむかひて志をいふ

伊豫簾高うかゝげて、ふけゆく影をひとりうちまもりて、つら〳〵思ひみれば、自ら心の塵も名殘りなくて、なべて萬のことぐさこそ隈なく思出でらるれ。　さるは、千種の花に露の匂を添へ、絲竹の音の響をすますらんたぐひの、艶になまめいたる世のつねのをかしさをば、更にも言はじ。　いでや澄み昇る光の、高くあらはれて、人の目とどめんに眩きばかりなるも、時の間に、あやなき霧のまよひにかきけたれて、ただ闇かとばかり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西になることのとどめ難きや、浮雲の定めなくて、昨日は榮え、今日は衰ふる世の有樣こそまづ覺ゆれ。　また淺茅が露に宿れども、所せくもおぼえず、海原の波に浮びても、廣きを知られざるは、高

き短き、おのがじしのすみかのきはぎはにつけて、身のやすかる心しらひによそへつべきもあはれなり。又落ちたぎつ瀬々の白玉は、これがために心清さをませど、野澤の水の濁に宿りても、更にみさびの汚しさを嫌はざるは、世に違ひ、事にさかふことなくて、光を韜(ツツ)み跡を隱すとかいふらん、さかし人の心の奥さへ、汲み知られぬべし。　また有るを有りとも見ず、無きを無しともさだめあへぬ、じり心のさとりも、ただこの光を磨きてこそ照らすべけれ。かゝれば、徒にわが世の傾くを歎き、老いとなるものとのみうちながめんは、いともいとも心あさしや。

大かたに見てやは過ぎん空の月、
ちぢに心をおもひよせなば。

九　雪をめづる記

かきかぞふ四つの時につけてむらぎもの心をやるわざなん多かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよろこぶ、三つのならはしこそ、世に類なきすさみとはすめれ。　ことさへぐ唐人のためしにも、敷島の大和の國ぶりにも、たかきもいやしきも隔つる事なく、古より今にかよはして、こを歌にによび、文に記してめであへるは、いづれを劣れりとも、いづれを勝れりとも、品定むべきたぐひならぬは、固よりあげつらふべきことならねど、所にしたがひ、人によりて、おのがじし心の引く方なくてやはあらん。　梓弓春の朝、うら〳〵と紐解きそむる花の心をとはんには、先づかしこの野づかさ、こゝの山里、露を凌ぎ、岩ほをたどりて、名ぐはしき陰をもとめてこそ、た

ぐひなき匂をも見るべけれ。　おどろなる垣ほのうち、あやしき伏屋の前に、一木ふた木を移し植ゑたらんは、なか〳〵に花の面をぞふせつべき。　また眞萩さく秋のさかり、隈なき月の光は、所をわかねど、あるは高殿の簾をからげて千里の空を望み、あるは行く河の流れに泛びて水底の影を翫びてこそ、心の雲もはるくべけれ。　小家しげく立ち竝び、はたばりなきはひりの庭に、うづくまり居て見んには、塵あくたけがしさも、澄みわたる光にいよゝあらはれ行きて、かへりては月うとかれとぞおぼゆめる。　かゝれば月と花とは、所がらこそあはれもうちそはるめれ。　さるはかたゐ翁がたぐひのしづたまき品賤くして、うつゆふのさく苦しき住家にかきこもり居つゝ、くさつゝみやまひにのみかゝづらふ身は、かの高殿の望、やかたのすさみは、いかでか思ひもかけん。　又野山の遊もおのづから時におくれをりを過して、常に心にそむくふしなん多かめる。　かれ雪ばかりは、此の二つに異なり。　葎にとぢたる門のうちも、だ一夜のからに、玉しく庭とうつろひ、あばらなる板屋が軒も、時の間に白銀をはやせるばかりに、すがたをかへもて行きて、朝ゆふべのいぶせさもさらにおぼえず。　まためなれたる市のちまたも、ちまちに景色をそへて、いひ知らぬ山里のおもひをなし、ゆきかふあき人の蓑笠までも見所ありと覺え、はかなき木草、よろづのものもさながらめづらかなりとのみめとどめらるゝは、ただ居ながらにして境を移し、所をかふるとやいふべからん。　かくてこそ心にたらはぬことなく、ほかに羨むべきふしもあらね。　されば此の雪にのみ翁が心をよするも、所に隨ひ、人によりたる、老のすさみなるはや。

花月草紙について

芳賀矢一

荷田在滿賀茂眞淵などを聘して、國學の興隆には大きな保護をなした田安宗武は、歌人としても一機軸を出した詠歌があつて、文學史中に其の名を傳ふべき人である。その第七子賢丸は、後に奥州白河の城主松平定邦の嗣子となつて、越中守定信と名のつた。此の人が人も知つた樂翁公である。

幼い時から才氣煥發で、學問を好んだことと、德行に勵んだこととは、文政十二年七十二歳で卒去した時まで、一生を通じて變らなかつた。凶荒疲弊の後を承け、淫靡な風俗の眞中に立つて、勤儉尚武の大改革に幕政の面目を一新した功績は事新しくいふまでもない。集古十種や獨看和歌集を見たものは、文藝の上にも如何に趣味をもつてゐる人であつたかを知つてゐるであらう。著述は澤山あるが、歌集の三草集三卷、隨筆の花月草紙六卷は、いづれも自筆本を刊行したのが世に行はれてゐる。就中花月草紙は政治・道德の上から、殖産工業・文學雜伎に亘つて書いた隨筆で、樂翁其の人の人物が躍如として、其の上に現れてゐる。侯伯の貴い身でありながら、些細な民俗・人情にも注意した點、あらゆる雜藝・遊戯の類までも經世家の立場から觀察してゐた點などには、一方にはその博覽多識を、一方にはその慧敏な天質を認めしめるのである。學問に就いての論評を見れば、異學の禁令を發したり、林子平を蟄居させたりした動機を髣髴の中に見ることが出來るやうである。文學史中に入るべき樂翁其の人の生涯、その理想を知る爲に、本書は缺くべからざるものである。單に文學としてのみ見るべき書ではない。

文學としては、併しながら、大きな價値を本書にゆるすことは出來ない。擬古文を用ひながら、往々古文法に外れた語法を用ひてゐるが如き瑕疵は姑く措いていはぬが、隨筆文學としては餘りに道德に囚はれてゐる。

花月草紙の名は風流であるが、本書は徹頭徹尾道德談に滿たされてゐる。駿臺雜話が全く教訓的であると同じやうに、花月草紙も亦德川時代の時代的特色を持つた教訓道話の文學である。花に對しても月に對しても、魚の水に游ぐのを見ても、鳥の餌を拾ふのを見ても感ずる所は道德を出でない。文章を論じても、武藝を說いても、美術・落噺を述べても、その根柢には教訓が潛んでをる。此の點に於て隨筆文學の祖先である枕草子とは雲泥の相違がある。徒然草さへ比類ではない。そして是等のものに文學として劣れる所以も、多くは此の點にあると思はれる。（名著文庫）

花月草紙（松平定信）

一　はしがき

〈久しう浦わの里に住める翁ありけり。め刈り鹽燒く暇には、えうなき藻屑かい集めて、鹽屋の窓の戸にかい挾み置きたるを、世のえ

めかり鹽燒く　しがの蜑のめかり鹽やき暇なみ櫛笥の小櫛とりも見なくに（萬葉集）

せ者の取りて歸りにけり。又の年行きて見れば、懲りずまにかい挾み置きたり。かく白波のよる〳〵ごとに數もつみしかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。この藻屑の端つ方に、月と花とのことながながしく書いたればそれをもて名たてしは、かのえせ者のせし事なりとぞ。「蜑のさへづりとこそ言はまほしけれ。」と、里の子はいひき。

二　櫻

無しと聞けば有りと言はまほしく、惡しきといふをば善きと事かへて言はんこそ、いと捩ぢけたる事なれ。櫻てふ花は吾が國の物なるを、唐國にもありとてさまざまためしなど引きつれど、櫻書いたる唐土の畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、無しと

こそ言ふべけれ。いでや、櫻と言はでしも、花とだに言へば、異木には紛れぬものを、ほのぼのと明け行く山ぎは、雲か雪かとばかり咲き滿ちたるも、霞こめたるゆふまぐれ、花のけはひも朧に見えて、ここにのみ暮れ殘す景色などいふは、淺かりけり。まいて、うてなの伸びやかなれば近劣するなどいふは、かのことかへて才おふ心に言ふ事なりかし。風に散りかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、軒端に向ふも、曙も夕暮も、露の干る間も、目かるゝ時しなきを、殊に吾が國ぶりの姿にて、枝もす直に、花の形もゆたけく、匂さへもこちたからぬも、異しきまでにこそ覺ゆるものなれ。さるを、何處にもありといふは更なり。曙・夕暮などと面白からんやうに言葉添ふるは、未だ深くそめし心にはあらざりけり。凡て言葉もて言ひ盡くさんと思ふはいと淺き心かな。

三　月

月のさし昇る頃、曙の空覺えて横雲のたなびきたるに、やゝ匂ひ初めたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず、辛うじてさし昇りけり。梢の憂さも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近寄る程あやにくに、月の方より雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こは如何にせんと暫し打ちまもるに、雲の端つ方赤う見ゆるにぞ、出で離れたらばはやかゝらん隈はあらじと思ふに、何時の間にかまた白雲の月待ち顔にたなびきて見ゆれば、胸うち潰れて打見るに、初の雲より出でたる光いと新しう見えて、殊にさやけし。かの待ちゐたる雲に向へば、また馳入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず、此處彼處にそれと面影見ゆ

五つの常
仁義禮智信
五つの道
二説ある。
君臣也、父子也、夫婦也、兄弟也、朋友之交也、五者天下之達道也（中庸）
父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信（孟子）

るにぞ、ひたすらにうらみはてて見ゐたるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと向ひゐたれば、心のはてなきやうにこそ覺えしか。

四　學問

「かの人は、雪螢あつめし窓に年積みてふみ見る道に心を盡くし侍るなり。されば世の中の事にはいと疎く侍り。」と言へば、「さることの道まねぶ人なりけれ。」と、褒めものするものありとや。もとより道まねぶものは、五つの常、五つの道よりして、人を治め己を修むる道まねぶより外の事はなし。されば、世の事にさとく、今のあたりのみかは、千とせの前つ世の事、見ぬ唐土の昔今のさまより盛り衰ふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさぐさに至るまでも明かなるこそ、道まねぶ人とは謂ふべけれ。この世の事におろかにては、いかで道まねぶ人は謂ふべからん。

五　雨

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄み渡りぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹きかふは、またさりぬるやうに覺ゆ。」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを。」といふ。「いかに。」と問へば、「いでや、早天の雨は更なり、草木の花咲きみのるも皆この惠にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞み渡りたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそかのどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて、春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて

いとこまやかに降れるが、きぬ霑せども降るとは見えず、軒の玉水も間遠に音して、すみ棄てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭の面の枯生の底に、綠やゝ添ひ行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、共にいと長閑なり。　ともし火かゝげても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄渡りぬるものぞかし。　その外梅が香のしめり夜深く匂ひ渡るも、花に憂しとかこちぬるも、哀れはありけり。　春も老い行く頃、蛙の時得顏にすだくもをかし。　時鳥の初音いかにと思ふ頃、村雨のはら〳〵と降り出でたるも、五月雨の幾日も降り暮らして、ふみの卷々繰返しつゝゐたれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。　また暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹き落ちたるに、柳・蓮葉なんどの葉裏白く見せたるも涼し。　やがて大きやかなる雨の間

遠に落ちたるが、後にはしきりに降り來て、物音も聞えず、土のにほひきたるもいと心地よし。　軒端は玉の簾懸けたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つ湖となりて、あるは瀧落し、又は水走らせたるに、人々暫し物言はでうちまもりゐたるもをかし。　やや雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。　はじめ雲の立出でし方は、はや空の一しほ綠に見えて虹なんど見ゆるに、木々の綠の庭潦（にはたづみ）に影見ゆるもいと涼し。　老いたる女など雷の音に驚きて這ひ出でたるが『今日のは若かりし時のごとよく霽れにけり。　今時のはかく霽ること稀なり。』なんど、はやくりごと言ふもあり。『彼はかくあわてき。』など言ひて、かたみに笑ひとよみつゝ、『今日は蚊も少かるべし。雷の音もいと微かなり。　この頃の暑さも忘れぬ。』とて、端近う出づ

れば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥え脹れたる蛙の、物待ち顔に空打睨みて、ふつゝなる音に鳴くもをかし。秋來る頃の雨は、昨日にかはりて何となう淋し。荻のうは風、外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞き馴れし筧の水の音までも哀れ深くこそ。月の前の村雨も亦をかし。まいて、やゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴きよるも哀れなり。この雨に木々も染めなんと思へば、『草なども生ひ出でなん。栗もはや落つべし。』などとわらはべの物寂しげに、ともし火に對ひつゝ言ひ出づるも、げにさまざまなり。夜深き鐘の音は打ちしめるものから、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、ふるごとまでも思ひいでて、鐘撞く人の心をも哀れと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染め添ふも、白菊のうつり

行きて一盛り見するも、尾花の露重げにうち萎れたるに、龍膽のうちみ深く咲きたるあたりも、つきづきし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまで凋み後れたるまた哀れなり。野分の風はおどろおどろしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀れを添ふるは、秋の習なるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降り來るも、また音かへて枕訪ふもをかし。月よりも闇の夜よりも哀れ深き物には侍らずや。」と言へば、「かうやうに言ひ竝べてはげにもといふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心はかはらじ。」と、心のうちに思ひて聞きゐしも、またをかしかりけり。

六　花の雨風

花の咲く頃、雨降り出でたるに、風さへそひぬれば「必ず花の時雨風のうさ添ふならひにて、人の世のわかれ離るゝことわり見する事にこそ。さりとてはつらき雨かな、うき風かな。」と言ふを聞きて、「雨降るとて五月雨のやうにはあらず。はげしきとて夕立のやうにはあらず。風添ふとても、秋の末つ方の野分、又は木枯のやうにはあらぬものを、花を惜しめば、殊更に雨も風も世になきやうに思ひ給ふか。」と言ひき。

七　月なき夜半

月なき夜半は、いと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて暗うして、寄せ來る波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ風の、袖にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はなほ蟲の音

もきそひ行くに、千草の花の色も見えて、沖漕ぐ船にまがふ雁がねの渡るも、いづこなるらんと哀れなるに、浦の葦邊に聲あはせたるもをかし。まいて曉頃に月のいづれば、宵の入日の殘れるたぐひにはあらず。海のおもて黄金の波の滿ちくるにぞ、言葉にものぶべしとは思はず。昔いぎたなくて、有明の月にうとかりし頃もありけりと思へば、口惜しきものから又羨ましく思へり。それより思の移り行きて、げに古はあしき波にも舟浮けて鰹釣りしこともありき。又はいと寒き頃海に入りて鮑とりしこともありしが、今のわかうどは、まだきに老いぬるさまするものぞ多き。その頃の昔物語に聞けば、「浦わの戰の恐ろしさに、妻子打連れて深山へ入りし世もあり。」と聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝる事もかのわかうどの老いたるさまするを

も、あはせて言はまほしけれど、また例の老いぼれて繰言いふとやむつかりなん。

八　日新の教

おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、事々に新に、物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、かねて知れる事と思ひてやぶれ取るも多し。かの賢き人も、女などに迷ひ、愚なる人に欺かるゝも、ひとつひとつに新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ひしこと心にそみ、去年のうれしと思ひし事心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして身を終ふるまで

も忘るな。」と語りし老人もありけり。

管鮑
管仲と鮑叔牙

九　交友の道

「友に交る道は、いかなる事か心得べき。」といふに「友はその所長を友とすべし。古き事好むには、その事に友とし、武技好むには、それに友とし、歌詠む者には、その道に友とするぞよき。さるに、歌とても此のふりは悪しかり、彼にまねび給ふは僻事なりなどといふにも及ばじ、ただ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交と雖も、この二人同じ徳、同じ心なりしにもあらじかし。世の中に同じ心の人といふ者はいと稀なる事なるべし。ただ我が好める方に引入れんとするもうるさし。この人この所は長じぬれど、こゝはいと短し。その短き所を引延べんとするはいと苦し。さ思ふ我もま

た其の短き所あるものを。殊に思ふ事皆諫めものせんとするを、彼の信と思ふは違へりけり。交るがうちにも知己の人は、いと稀なるものなり。それらよく言葉を求めなば、もとよりいふべし。されど屢すべきにはあらずかし。淺き契の友なりとても、友といふうちならば、その人の上の存亡にかゝはるばかりの事ならばいふべし。すべて强ひてかくせん、かく救ひてんと、まげてもと思ふはみな中道には背けりといはん。ただその所長を友とすれば、交り難き人もなく、我に益なき友もあらじ。彼の友によりてわが方の亂れんとするは、皆その短を友とする故なり。」と答へし者ありきとや。

一〇　利害得失

事に處するに、利害得失に心をつくるも宜なれども、まづそのことの筋をよく見て、さて利害得失をもて照らし見るべし。世にいふ才あるものは、まづわが利害得失早く見ゆれば、利に就き害に遠ざからんとのみして、その筋を失ふなり。ただ害ありとも、かくすべしといふはいといたう重き筋の事なり。されば、その筋の重きと輕きと利害の重きと輕きとをかけ合せても、その筋の方重きは害にあふとも、その筋に從ふべし。また才なくして筋にも暗く、ただ一筋に心得るものは、筋の輕きにも重き害を得て辭せずとするもありぬべし。才ありても道まねびて明かなるにあらざれば、輕きを重しとして、つひに道失ふものこそ多かめれ。

一一　兩頭のくちなは

昔、兩頭のくちなはありしと聞けばとて、くちなはの同じ程なるを捕へて、二つの尾をしかと結びて離れざるやうにして、庭へはなしたり。一つは南の方の草むらさして行かんとすれば一つは北の方の林へ入らんとし、とみに行かんとのみして一つところにのみゐけり。戯れにおり立ちて驚かせば、愈、挑み合ひて、一つ所に躍りゐけり。いかがすらんと折々見たるが、三日ばかり經て、二つのくちなは和ぎて、心を共に合せ、尾の方を繩の如くにして、頭を二つ並べて行くにぞ、常のより遙に速に這ひゆきけり。

げに人も心の一つなれば、目も耳も心にしたがひて見聞きし、手足もひとつ心なればこそかゝりけれ。もし一つ一つの心ならば、右の手は左を凌ぎ、左は右をそねみ、手して取らんとすれば、足はよそへ行き、左は左に行かんとすれば、右は右へ行かんとして、ひとつも人の事足ることはあらじかし。さるに、いにしへより國のつかさたるものら、或は猜み憎み、又はかたみに凌ぎなどして、ただにわが威を振はんとするは、何の心にかあらん。國家の事を他所にして、ただわが身あることをのみ心とするにや。かくては亂れざる國はあらじを、わが身にのみかゝづらひて、その事を思はぬは、たとひ何の才あり、何の力あるものとても、何にかはせん。

松屋文集（藤井高尚）

一　山口栞の序

みやびことばのはたらくやうをわきまへずして歌よみ、文かくは知らぬ山路を行く人のふみ迷ふにいとよう似たれば、ことのは山

に分け入る人の、山口の道の栞に書きあらはしたる、此のふみとぞ。其の人は、若狭の國小濱のさとにて、義門法師と聞ゆる人、十とせばかり過ぎにし年、都にて始めて會ひしより、此の年頃己を師のやうに思ひたのむ人になん。子のおとなぶるにたちかはり、親のしれゆくごとくに、此の人は師のみ教を學び行ふいとまに、み國の古への書を讀み、かなのよろづのさうしの學問をさへ心に入れ、殊にこの言葉のはたらきのすぢをば、我が心と深く思ひえて、あさましきまでありがたく、己は年老いて心もくづをれ、ほけ〳〵しうなりまさりて、今はかへりて語らひ人にして、わづかなるこしをれ文かきても、此の人のさだめを聞かぬこなたは、いかなる僻ごとかあらんと覺束なくぞ思はるゝ。かばかりの人なれども、自らをば才なきやうに思ひおとして、そのくさぐさの書見るに、爪じるしをして、物

知れる人になほ問ひ聽かんとするなど、まめやかさも、志の深さも、世に珍しうなん。かくてはいよゝ古ごとの學びも進みに進みて、わがなきうしろにもなほをかしき考など出できそはんを見る心地して、あす知らぬ老の心にも嬉しうおもだたしう思ふよしを、はしがきのついでに聊か祝ひおくになん。

二　山館冬來

神無月のついたちの日、昨日の秋の名殘を慕ひて、殘る紅葉を尋ね見がてら或人の山住をとふに、柴の戸閉ぢて人けも見えず。さゝ垣の隙よりのぞけば、苔むせる庭に紅葉散りしきたり。此の住居こそ羨ましけれと打ちずして暫し立てるに、うしろより人の來る音す。かへり見れば、あるじの落葉拾ひて歸れるなりけり。いた

此の住居こそ　新古今集慈圓「山里に訪ひくる人の言ぐさは此の住居こそうらやましけれ」

く喜びて、いざ此方にと誘入れて、かくて住むほどの物語りす。珍しく聞きゐたるに、冬たつ日なるもしるく、時雨の降る音の聞ゆれば、とのかたを見出すに、山風荒々しく吹きて、四方の木の葉の散亂るゝにぞありける。今日だにかゝり、まして冬深くなりて、雪霰がちならんにはとぞ思ひやらるゝ。あるじすびつに火おこして、かの栗を燒きて箱の蓋におきて差出したるも、さるかたにをかしきまうけのさまなりかし。

閑田文章（伴蒿蹊）

一　情は新しきをもて先とす

歌の詠みざまは、中昔よりこなた、賢き人々の教餘りなければ、拙きおのれ今更に何をか言はん。されど唯一つの思ふ事は、情は新しきをもて先とすといふなり。惡しう心得ば、道なき所に道を求め、うばらからたちにかゝりて、手足を傷ふべし。凡そ喜悲の時に當り、花に月に對ふをり〳〵、又題の歌も、齊しくまごころに思ふ所を打出づるは、新ならんと構へざれども、おのづからに新なる趣出で來べし。おのれまだ若かりし時、某の卿に從ひ侍りしに、卿教へ給はく、「何にまれ得たる題を心にしめて案じめぐらす時、人に訣はず己が誠より詠み出でなば、假令吉野の花を雲と見、龍田の紅葉を錦といはんも新しきなり。」と仰せられしは、年月を經ていよゝ味あるを覺えぬ。固よりよきあしきけぢめは、おのれおのれが才不才に由るものから、生れながらに知る人はあらじなれば、古を師として、心はすが〳〵しくなほく、言はけだかく正しきをならふべし。か

くてぞ姿も苦しげなくのびらかなるべき。見聞につけて心は移るものなれば、巧に新しきをむねとし、詞はた曲げかざりて興を求め、我賢しと構ふるにはゆめ倣ふべからず。

二　冬のこゝろ

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がれ、木の芽はるさめも時雨にかはり、それも何時しか染めぬべきものなくなりぬれば、みぞれにうつりて雪と積る。一とせの月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪のうなゐ子が大人しくなりぬと言はれしなんやがて老の始にて、終に髭髪の白くなりぬるをしもつくづくと思ひ比べて埋火のもとにのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし。「少壯いくばく時ぞ、老をいかん。」とからうたにも聞ゆるを、徒らに朽ちはてぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車のくつがへるを後の車の戒てふ事もあり。我になならひ給ひそよ。冬は歳の餘りともいふを、此の頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそと言はまほし。老いては益壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。唯寒きに堪へねば、ひたやごもりにこもる程に、眠は宵よりきざして、しかも夜深くは目覺めぬ。冬もうし老もうし。こは、老の心をうつすとやいはん、冬の心をうつすとやいはん。

少壯いくばく時ぞ　少壯幾時兮、奈老何（漢武帝、秋風辭）

前の車の云云　公乘不仁曰、周書曰前車覆後車戒（說苑）

老いては益云云　丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯。（後漢書馬援傳）

三　大森求古の故國に歸るに寄す

天地の間にありとあるもの、皆おのづからにうけえたる所あり。今、ただ一つの鳥のうへもていはんに、木草の實を喰ふべきものと

這ふ蟲を喰ふべきものと、嘴のやう異にて、相通はぬあり、かれこれを共に喰ふべきあり。相羨むともかなふべからず。いかにともせんすべなかるべし。しかはあれど、口あれば喰ふべく、肩あれば着るべし。肩ありて着ず、口ありて喰はざるは誰があやまちぞ。上が上より下が下まで身のほど〳〵につきて、世のわたらひをなすべきための心ばせといふものあり、手足あり。これはた、かの嘴のごと天の與ふる所にして、意を用ひて手足を休むるもあり、手足を動かして意を用ひざるもあり。ともに働かすべき際もあらん。されば、うけえたる所のまに〳〵、士・農・工・商、おのれおのれが業を守らひつとめなば、まどしとても飢ゑこごゆるには及ばず。木つゝきの木の裏の蟲を求むるにはたらじを、暮るると明くとに怠りながら、幸福を求むる人は、木によりて魚をもとむるにもたぐふべくな

ん。こゝに男資規の交をむすびし求古ぬし、年ごろ都に遊びながら、志を得ず事たがひのみゆくに、近き年となりて故郷のうから、はらから、皆ほろびて繼ぐべき人なければ、強ひて歸り給はんことを催す人あるからに、力なく出立たんとし給ふに臨みて、「何にまれ心の守になるべき言を述べてよ。」と求め給ふ。

おのれもとより才拙きが上に、老のならひのもの忘草心に繁りて、ふつにいふべきことを知らず。しかはあれど、送るに言をもてすなるは古のよしとする所なれば、默もえあらで、言ふりたれど、易きにゐて命を俟ち、身を懈らずつとめ給はんことをすゝむ。かゝらばその家を起し給はんも難きにあらじ。はた年月都に馴れて、故郷ながら鄙の住居のものうからんもさることなれど、こもまた何か。天に月あり、地に花あり、四つの時の移り變るおのづからの景

色をたのみて、心をのばへ給へや。
　よしやゆけ、みやこも鄙もこゝろだに
　やすくしへなばやすからむ世を。

弛めて張らざる

「張而不レ弛文武弗レ能也、弛而不レ張文武弗レ爲也。一張一弛文武道也」（禮記）

又弛めて張らざる文武はせず、張りて弛めざる文武はあたはずといふことをおもひて、

一つきの酒におもひをやりてまた
　なすべきわざはよくつとめてよ。

といふは、享和改元春三月なり。

櫃園文集（中島廣足）

一夕

遠山寺の入相の鐘、塒に歸る夕鴉も、いつしか聲靜まりて、むかへる書卷もやう〳〵見えずなり行くに、心ゆくわたりはいと口惜しきものから、しばし打ちおきて端の方に出づれば、暮れ殘る梢どものほのかなる山の端に、はつかにあらはれたる三日月の影こそ、いとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥の怪しき聲に鳴きゆくが、何となく物寂しげなるを、來むといひつる友、はたくれ過ぐしてやと思ふも心もとなきに、ともし火かゝげたるこそまづ嬉しけれ。

二夜學

寺々の初夜鐘の響もをさまりて皆人も寢たるに、いと嬉しうともし火あかくしなして文机に打向ひたる、いみじう心澄みて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知られて、深き心ばへあ

るくだりくだりも、おのづから解き得らるかし。かゝげつくして
も、なほねぶたさも知らず、油さし添へつゝ見もて行くに、遠き世の
人も、たださし向ひかたらふ心地す。冊子つくりて、をかしきふし
ぶし、あるはふと思ひ得たる事などをば、墨おしすりつゝ書きつけ
などするもをかし。鷄の聲は夜深きにやと思ふに、いと疾く明け
放れたり。しばしとて打ちねぶる夢の中もあだしごとならんや
は。

三　漁村

蜑のすみかばかり哀れなるものはなし。いと便なき海邊の、風も
たまらぬ松蔭などに、唯假りそめに造りたる藁屋どものさま、浪打
寄せなば、やがて流れも失せぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪に

書きすさびたるなどは、なか〳〵にをかしきものから、さて住まひ
なば、何心地かせましと思ひやるだに心ぼそし。夕つ方など、年老
いたる男子の手がらみしたるが、磯邊に立ちて、「今日はいと遲くも
あるかな。」などいひつゝ、沖の方をまぼりをり、うまごどもにやあら
ん、眞砂の上を走りありきつゝ遊びゐたるに、入日さしたる島陰よ
り、三つ二つ歸り來る舟の、かぢ引きをりて、誇らしげなるを、老人待
ち得顏に打ちほゝゑみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。汀に寄
せて跳び下るゝまゝに、綱繰りよせなど、とかくしつゝのゝしるに、
男も女も數多出で來て、大きなる籠に魚ども取入れつゝ、擔ひもて
行くさま、さはいへど賑はしげなり。くぐつめく物もて來て、小さ
き魚三つ四つ請ひもて行く童などもあり。すべて人多く立ち込
み、騷ぎて、舟の邊喧しく、さし寄りてのぞくべうもあらず。いと長

き綱の渚に懸け乾したるを、繰りためてとり入れなど、やう〳〵靜まり行けば、此方彼方火ともしたるすきかげ、壁もあらはにていと哀れに見ゆ。一夜宿りて見れば、浪風の響枕をゆすりて、露まどろまれず。曉方鄰の家々目覺ましして、なりはひの事どもなるべし、怪しう聞き知らぬ事どもを、おのがじし聲高に言ひかはしたるげに蜑のさへづり、珍しうもをかしうも。

四　山家の興

山里のすまひは淋しきやうなれど、さるかたになれぬれば、むかなかにをかしうなん。さるは花・もみぢの色香はさらなり、鳥・蟲の聲につけてもおのづから心を慰むるくさはひ多く、松の柱、竹の編戸、小柴垣結ひめぐらしなど、よろづの調度さへいたうことそぎて、庭などもただおのづからなる巖のたゝずまひ、軒近く滴る水を古木のうつぼめくものにうけためたる、飯炊ぐにも、手洗ふにもただこの水にて事足りぬ。まれ〳〵訪來る人、はたあるじまうけなどいふこともせず、蕨・土筆・たかうな・ところなどの、折に隨ひ所につけたるものして、手づからかめる白酒すゝめなどす。同じき物語も人聞きはばかるべき事しなければ、心にのこす隈もなくて、醉すゝみぬれば、やがてうち連れつゝ、たださながらなるうちとけ姿にて、そこはかとなくあくがれ歩きなどするも、「すまであはれは」とかいひけんやうに、又なく心ゆきて、命も延ぶるやうになん。

すまであはれは　「心深くきこそ心は通ふとも住まであはれは知らんものかは」（新古今集西行）

五　書

夏日の暮れ難きをも知らず、冬夜の長きをも覺えぬは書見る心の

樂しさになんありける。さるは道々しきすぢのはさらなり、家々に記せる何くれの書、又かりそめの筆すさびなど唐・やまと、いにしへ・今と、いとさまざま、多かる中に、わが立てたるすぢならぬも、見もてゆくまゝには、えうあることどもありて、かにかくにあかず面白く樂しきは書にしくものまたなかりけり。遠き世のを見るほどは、われもその世にある心地して、やがてその人々を友となして打語らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりてよしなしごとども書きつくるが、たま〳〵もちりぼひ殘りて、後の世に傳はらば、今のいにしへを見るが如く、後の人はた我を友とせんには、千歳の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなんおぼゆる。よろづの心やれるわざ、いとさはなれど、ただ一人ゐて、あかず樂しきは、書の外に又何かはあらん。「あるが上にもあらまほしきは書なりけり。」と

鈴屋の翁
本居宣長

山上の國つかさ
山上憶良、歌は萬葉集中に多くある

七種
秋の野に咲きたる花をおよびをりかき數ふれば七種の花

鈴屋の翁のいはれたるは、げにさることにこそ。

泊洒文藻（清水濱臣）

一　萩をめづる詞

木の花は春に匂を盡くし、草の花は秋を時とすれば、誰も皆春は山邊をとめ、秋は野路にあくがるゝをこそ遊の道の常とはすれ。抑、花野の秋に咲亂るゝ千草は、とをはたみそよそと、其の數多かめれど、これはしもと取出でて愛で弄ぶべきは、彼の山上の國司のよみ置かれたる七種になん盡きぬべき。そが中にも亦勝れたるは何れとか定めん。女郎花はいとなまめかしく懷かしげなれど、唐人（モロコシビト）もなにがしとか其の名をよびておとしめたるもことわり、花の盛

萩が花尾花葛花撫子の花女郎花また藤袴朝顔の花。（萬葉集）

もろこし人も云々

女郎花の異名を敗醤といふ

秋とはいはん

人皆は萩は秋といふよし吾はを花がうれを秋とはいはん。（萬葉集）

りなる程こそあれ、はて〳〵はうたてあやしき香のそひて、花瓶に入りたるなごりなどもあさましきまでに、鼻さへ打覆はるゝや。撫子は唐にやまとに色を交へてうるはしくあてなれど、常夏にうつろはずして、秋にまで咲きかゝれるが飽きたる方もあるべし。朝顔はいとらうたし。朝ごとに色改むるなど心地清げなれど、これはまた見る程もなく萎れ渡りて、露のひるまをだに待たぬが事足らぬ心地す。葛は風のまに〳〵吹返す葉末のうら珍しきこそあれど、はひ廣ごりもうるさく、藤袴は匂のいひしらぬはさるものから、見立てなき花のさまならずや。尾花ぞ古き歌にも「秋とはいはん」と詠みたれば、あるが中にも優りたるやうなれど、廣き野末にめぢの限り高やかにさし靡きたるは、白妙の袖ともあやまたれて心とまる心地すれど、二もと三もとが處せきつぼの内などに生ひ

立てらんは、何のをかしき節かあらん。いでや、萩の花を見よ、秋の初風やう〳〵身にしみ渡る程より、かつがつ咲きそめて、或はなだたる大野ら、或は程なき前栽、多くも少くも、やごとなき御垣の下にも限らず、葎はふ賤がはひりをもきらはず、處えて匂ふさま懷かしくはためでたきに非ずや。さらば七種の内にも優るべく、千草の中にも勝れたるは、此の花をさしおきてまた何れとかいはん。

二　擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもの亦しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらん、擣衣の音の雁がねをさそふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆゑか。皆あら

ず、聞く人の心のわびしきなり。

三　茶の詞

梅の尾の源深き流を汲みて、宇治の木の芽窓に煮るすさびは、嵯峨の帝の御世に種播き初めさせ給ひしことのおろ〳〵見えしのみにて、家毎にかくもてはやすは鎌倉の末、室町の初よりなるべし。いでや、心を清ます興びといはば、是を放ちてまた何事をか求めむ。

梅の尾の流を汲みて今も世にうぢの木の芽を煮るが樂しさ。

梅の尾の源　明恵上人が茶を、栽培したことを指す。

四　縣居翁の墓參會に

縣居翁　賀茂眞淵

おのれ人に異なる一つの癖ありて、常に夢みる事をおもしろみ、夢見る事を樂しむ。しかはあれど、よき夢見たりとて人に誇り語らんとも思はず、悪しき夢見しとて夢ときにあはせて物にかへうつさんともせず。おもしろむしるしにや、ぬる夜として夢見ぬ夜なく、樂しむからにや、はかなき事らも能く心の底に覺えて忘れず。如何なればおもしろく、如何なれば樂しきぞといふに、夢といふものは思ふ心より見るとはいへど、いとゆくりなき事をのみ見て、思はぬ野山にもさまよひ、知らぬ昔人ともむつ物語し、或はをかしき事、或はおそろしき事、或は苦しき事、昔かと思へば今、今かと思へばむかしげにうつゝなきものになんある。さはいへ、夢といふものは絶えてなからましかば、よるはただ徒にいねたるのみにして死せるに等しかりなまし。よしやはかなき夢心地にもせよ、是を見て忘れず、是を見て樂しまば、いねし程も起きゐたらん心地して、五十年の命も百年の齡に思ひ比べられぬべし。徒に死せるが如きに

勝らじやは。己が夢好みは、此の思ふ心ありての事なりけり。—まことや、いにし世を忍び、過ぎ行ける昔を思出づれば、すべて何かは夢ならぬ。悔やしく過ぎし昔語は、取返さんにもよしなく、語出でんもやくなき事ながら、己いと若くて、二十に三つ四つたらぬ程より、錦織の屋のあやなる手振に思ひをかけ、芳宜園の色なる言の葉を心に染めて、晨・夕に馴れ睦び聞えて、古事學の事ら問ひものしたるに、二人の大人だち、常にともすれば縣居の翁の世にいまそかりし折の事うち語り聞かせられて、「萬づただ夢のやうに覺ゆるは。」など慕ひ聞えられしが、其の二人のぬし達も今は世におはせずして、その語り聞かされし折の事らも、また五年・十年の昔語となりにたり。おのれ才拙く心たましひたゝはしからで、學の常に愚なれども、幸に二人の大人だちになれ親しみて、翁の昔語を聞けり。其の

錦織の家
村田春海
芳宜園
加藤千蔭

翁の昔語を耳に留め、二人の大人だちの世にいまそかりし晨・夕を目に忘れずしあれば、翁のとありし節、二人の大人だちのかゝりしすさみを、事に觸れては思出でて、かつ慕ひかつ懷かしむ。これ亦面白く樂しき夢物語ならずや。あはれ今この御寺に、翁のおくつき詣するも、年毎の恆例のやうになりて十年あまり四年にもなりぬ。星移り月變らば、今も亦後の世の夢物語となりなまし。今年も例の人々と共に此のおくつき詣すとて、豫めことがきを設けて、「いにし事らは夢の如くなり」といふ事を、歌や言葉やと、人もよみ吾も作らんとするに、始めにいへる己が夢好みの癖思ひよそへられて、はかなきそぞろ事しも言ひ續けられたるなりけり。

この御寺
品川東海寺

山寺のこけの筵に旅ねして
ふりしよしのぶ夢がたりせむ。

五　花に寄する祝言

江戸の大城いくらもさらぬうしとらの方、大比叡うつされたる上野の岡のふもと、志賀の水海なせるしのわづの池の汀に、さゝなみの屋の翁といふありけり。その身おほやけに仕ふるきはにもあらず、わたくしの主といふもなし。くすしのわざをなりはひとすれど、人をいかし病をつくらふてだてを知らず、なまじひにふみの林をわけながら、其のおくかを極めんともせず。すずろに言葉の園に遊ぶとすれど、色なる一葉をも拾ひ得たる事なし。唯春秋を花紅葉の中にまじり明かし暮らして、齢早く四十に過ぎにたる、天の下のいたづら人なりけり。そも〳〵天地の中にはらまれ、世の中にあれとあれ出づる人の身に、何事をか幸とし、何わざをか樂し

みとは思ひ、いかなるふしにか喜ばしく、いかなるをりにかうれしと言はん。あるはつかさ位にのぞみをかけ、あるはこがね白がねを家にくらに積重ねんことを願ひ、あるは桂の枝を折りて、雲の上までも、名を輝かさん事をほりし。あるは綾錦を身にまとひ、絲竹の音に心をとらかすをたけきこととするなど、心々のひくかたによりて、とりどりに捨てがたきならひなるを、此のいたづら人、さらにかゝるすぢを心ともせず、もはら野山の遊に身をゆだねて、樂しきことの限りと思へるは、いみじき世のすねものなりけり。

此の春も二月のはじめより、むかつをの梢に目をつけ、匂ひ初むるを待ちとりて、朝に行き夕べにいたり、花の陰に立ちもとほりつゝ尙あかぬ餘り、飛ぶ鳥のあすかの山をわけ、行く水のすみ田河にさかのぼりて、花より花に狂ひめぐりけり。さるに、此のいたづら人、

自ら思ひけるやう、あはれさちある身や。あはれ樂しの身や。われらいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、櫻花絶えて匂はぬ唐國の境に、生れ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに、花見ることを得ん。今うれしくも日の本のやまとの國に生れたること一つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、四方の海靜かならず、浪風しくめる世に生れ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに、花見る事を得ん。今嬉しくも治まれる大御代に生れあひたる、これ二つの幸なり。我らいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、深き八重山の奥、遠き島隱れに生れ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに花見ることを得ん。今嬉しくも咲く花の匂ふが如き江戸の大城のもとに生れあひたり。これ三つの幸なり。われらいかばかり野山の花にあくがれ

手のやつこ云々　方丈記の句

んとすとも、位高くつかへの道にいとなく、よろづ所せき身ならましかば、何にかく思ふがまゝに花見ありくことを得ん。今嬉しくも天の下に、ほださるゝ事なく、身を心にまかせたり。これ四つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、病つねに身をおかし、手の奴、足の乘物、心にまかせずば、何にかく思ふがまゝに花見ありくことを得ん。今嬉しくも身すくやかに、いたづくかたなし、これ五つのさきはひなり。あはれまことに樂しくよろこばしく嬉しく、幸ある我が身ならずや。かく思ひほこるあまりに、花に向ひてうたひ出でたる歡び歌、

わか櫻にほふみくにうまれ出でて、
花もてはやす身をぞよろこぶ。
治まれる御代のめぐみにあひにあひて、

花にあきぬる身をぞよろこぶ。
鳥がなくあづまのひえの花盛り、
のきばにめづる身をぞよろこぶ。
けふいくか花より花の旅寢して、
家路忘るる身をぞよろこぶ。
春ごとに花の盛をたれこめず
ながめくらさぬ身をぞよろこぶ。

六　泊酒舍に蓮の花を見る詞

大よそ、人の世の中、おのがじしのなりはひ暇なきものから、猶その暇には何くれの心やりぐさのなくてやはあらん。　さるは畫かき手習ふわざを始めにて、小琴をあそび圍碁にともなふたぐひをこ

そ、古へ人も心ゆくものにはいひおきつれ。　しかはあれど、おのがをぢなき心におもひたゆめられて、さるたぐひの事はおのづからに物憂く、ただいとまあるをり〳〵は、世ばなれたる境に心をよする癖なん絶えざりける。　かれ幼くて市の中におひたちしほどよりいかでちりひぢの跡たえたるすまひせばやと思ひわたれど、さるよすがもあらで春秋を送迎へぬるに、二十とせといふ齡にまで二つばかり足らぬほどにやありけん、よしありてこの上野の岡のかたへなる茅のまちといふ所に住みうつりぬ。　所のさまおのづから山里びて、茅が軒、蓬の門、すべてひたゝけたるあたりとはやうかはりて心ゆく方ぞ多かる。　山のたゝずまひ、水のありさま、春秋につけつゝあはれたえせぬが中に、わきて蓮の花咲くころこそ、こよなく見所は多かれ。　波清き池の心いとひろらかに、花に葉にい

花物いはまほしげ
「誰謂花不レ語、輕濤激兮影動レ唇」（和漢朗詠集）

づこをはかともなく、目ぢのかぎりにほひみち、あしたには露ながらゑまひひらけて、さしのぼる日影をまちとり、夕べには雨の名殘しづまりて、くるゝ浪間にねぶれるなど、「花物いはまほしげなり。」といへるから歌の心ばへさへ思出でられて、この世の物としもおぼえずなん。かゝるながめに朝夕なづさひては、いとどかの市のちまたのいとはしさもおぼえて、かく所得しすみかの世にさちある事をぞ悅ぶなる。さるは、

ちりの世はよそにぞすまむ、池水の
にごりにそまぬ花になれつゝ。

鈴屋集（本居宣長）

一　山路の菊の物語

桃の花
武陵桃源の故事。

ある人、長月の九日に、げふは高きにのぼる日とて奥まりたる山里に年ごろ住む人の久しく音もせぬ、とぶらひがてらまかりけり。やゝ深く入る處なりければ、道のほどいたく困じにたり。このもかのも、千種の花ども皆うつろひて、あるかなきかになりぬるうちに、花薄のたかやかにてひとり殘れるたもとも、いと露けげに見わたさるゝなど、哀れ深き山路にもかゝりけることと思ひつゝ入りもてゆくまゝに、道のほとり近く流れたる谷川の水の音すみて、いといさぎよきが物にもにずいみじくかうばしきに、あやしくなりて、足も休めがてら暫し立休らひて思ひめぐらせば、これやさは菊の雫の落ち積りて流れ來るならんと、桃の花ならねど、水上の尋ね見まほしくなりて、心ざしのところをば忘れて、此の流につきてのぼるに、はかばかしく道もなきそばづたひをたどり行けば、いとど

しく苦しくて、足のうら動かれずわびしきを、わりなくねんじつゝ強ひてものするまゝに、思ひしもしるく、菊いとしげくある所にいたりぬ。今を盛りと咲き亂れたる花の色香は、なほおくふかくとあながちに分け入るほどに、間なくしげくちりかゝる袖の露、打掃ふまにも、千歳をや經ぬらんと、かつがつ仙宮にも至れる心地さへぞしたりける。めもあやにところせく匂ひ渡れる片つ方を見れば、巖のかたそばに尻かけて、前なる流に目をすまして、酒飲みをる人なんありける。いみじく年老いて、頭に黑きすぢなく、髯いと長くなど、すべていと神さびたるいと〳〵あやしく音にきくやま人といふものにこそと、かつはゆかしく、有りさまも聞かまほしければ、近く寄りて、かく世ばなれて物ふかき山中にひとりかくて物し給ふはいかなるゆゑにかと問へば、のどやかに見上げて、こは何處

よりいかなる人のおはしつるぞ。翁は此の巖の中に、かくて八千年の月日をなん過しつるを、更に〳〵世の人の訪ひ來ることもなきを、此の菊の花咲く秋ごとには、なほわくらばに訪ひ來る人もやと、絶えず心には待ちわたり侍ると、いとかうがうしき聲して語りつゝ、今日しもかくたづね來つることを、いとうれしと思へるけしきにて、

世の中のうきをも知らで白菊の
花さく秋を八千度ぞ經し。

とて持たるさかづきをさすに、ただ夢かとばかりたどられて、いらへんことのはも覺えぬを、うち思ふまゝに

たぐひなき君が齡をきくの露
われも千年の契むすばむ。

とてのむ酒もよのつねならんや。

二　述懷

昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎに過ぎ行く世の中をつくづくと思へば、あはれ我が世も幾程ぞや。手を折りて數ふれば、はやみそぢにも餘りにけり。命長くて七十ぢ、八十ぢ生けらんにてだに、早くなかばは過ぎぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、ゆくさき程なき心地のして、心細くぞ覺ゆる。

かくのみはかなく、心なき木草、鳥けだものの同じつらに、何すとしもなく明し暮らしつゝ、生ける限りの世を盡くして、徒に苔の下に朽ちはてなんはいと口惜しく言ふ甲斐なかるべき事と思ふにも、萬にいたり少く、拙き身にしあれば、何事をしいてしかは。世の人にも數まへられ、なからん後の世に朽ちせぬ名をだに留めましと、いとど人に似ぬ愚ささへとり添へてぞ、悲しく心憂かりける。さりとて、はた身をえうなきものにはふらかし果つべきにもあらず。かくのみ拙く愚なる心ながら、何わざにまれ、怠なくわざと心に入れて勉めたらんに、遂には一つ故づけてなのめにしいづるふしもなどかはなからんと、あいなだのみにかゝりてなん。

玉勝間（本居宣長）

一　古書

めづらしき書を得たらんには、親しきも疎きも同じ心ざしならん人には、かたみにやすく貸して見せもし、寫させもして、世に廣くせ

まほしきわざなるを、人には見せず、己ひとり見て誇らんとするは、いと〳〵心ぎたなく、物學ぶ人のあるまじきことなり。但し得がたき書を遠くたよりあしき國などへ貸しやりたるに、あるは道のほどにてはふれうせ、あるは其の人にはかになくなりなどもして、終にその書かへらずなる事あるは、いと心うきわざなり。されば遠き境より借りたらん書は、道のほどのことをもよくしたゝめ、又人の命はにはかなることもはかりがたき物にしあれば亡からん後にもはふらさず、たしかに返すべくおきておくべきわざなり。凡て人の書を借りたらんには、速に見て返すべきわざなるを、久しく留めおくは心なし。さるは、書のみにもあらず、人に借りたる物は、何も〳〵同じことなるうちにいかなればにか、書はことに用なくなりて後も、なほざりに打捨ておきて、久しく返さぬ人のよに多

き物ぞかし。

二　學問

世の中に學問といふは、からぶみまなびの事にて、皇國の古を學ぶをば、分けて神學・倭學・國學などいふなるは、例のから國をむねとして、御國をかたはらになせるいひざまにて、いと〳〵あるまじきことなれども、いにしへはただからぶみ學びのみこそありけれ、御國の學びとては、もはらとする者はなかりしかば、おのづからしか言ひならふべき勢なり。しかはあれども、近き世となりては、皇國のを、もはらとするともがらも多かれば、からぶみ學びをば分けて漢學・儒學といひて、此の皇國のをこそうけばりて、ただに學問とはいふべきなれ。佛學なども、他よりは分けて佛學といへども、法師の

ともはそれをなんただに學問とはいひて、佛學とはいはざる、これ然るべきことわりなり。國學といへば、尊ぶかたにもとりなさるべけれど、國の字も事にこそよれ、なほうけばらぬいひざまなり。世の人の物いひざま、すべてかゝる詞に內外のわきまへをしらず、外國を內になしたる言のみ常に多かるは、からぶみをのみ讀みなれたるからの、ひがことなりかし。

三　新なる說

近き世、學問の道ひらけて、大かた萬のとりまかなひさとくかしこくなりぬるから、とりどりに新なる說を出す人多く、其の說よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者未だよくもとのはぬほどより、我劣らじと世に異なる珍しき說を出して、人の耳を驚かすこと今の世のならひなり。其の中には、隨分によろしきことも稀には出で來めれど、大方未だしき學者の、心はやりて言出づることは、唯人にまさらん勝たんの心にて、かろがろしく前後へをもよくも考へ合さず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじきひがごとのみなり。凡て新なる說を出すは、いと大事なり。幾度もかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、何處までもゆきとほりて、違ふ所なく動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後に今一度よく思へば、なほわろかりけりと我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

四　新にいひ出でたる說

大方よのつねに異なる新しき説を起す時には、善き惡しきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者に憎まれ誹らるゝものなり。あるは己がもとより據り來つる説と、いたく異なるを聞きては善き惡しきを味はひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるに棄てて取りあげざる者もあり。あるは心のうちには、實にと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに從はん事の妬くて、善しとも惡しとも言はで、唯うけぬ顏して過すたぐひもあり。あるは妬む心の進めるは、心にはよしと思ひながら、其の中の疵を強ちに索め出でて、すべてを言ひけたんと構ふる者もあり。大方舊き説は、十が中に七つ八つは惡しきをも、あしき所をば蔽ひ隱して、わづかに、二つ三つの取るべき所あるを取立てて力の限り助け用ひんとし、新しきは、十に八つ九つ善くても、一つ二つのわろき事を言ひたて、八つ九つのよきことをもおしけちて、力の限りは、吾も用ひず人にも用ひさせじとする、こは大方の學者の習なり。然れども又、まれ〳〵には新なる説のよきを聞きては、舊きが惡しきことを悟りて速に改め從ふ類も無きにはあらず。舊きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひ寄れども、自ら定むる力なくて、疑はしながら、さてあるなどは、新なるよき説を聞きては、かくてこそはといみじく悅びつゝ、忽ちに從ふ類も有りかし。大方新なる説はいかによくても、速には用ふる人稀なるものなれど、よきは年を經ても、おのづから終には世の人の從ふものにて、普く用ひらるれば、其の時に至りては、始に妬み謗りし輩も、心には悔やしく思へど、後れ馳せに從はんもなほ妬く人わろく覺えて、快からずながら、舊きを守りてやむ輩も多かり。しか世の中の論定まりて、皆人の從

ふ世になりては、始より速に改め從ひつる人は、賢く心さとく思はれ、舊きにかゝづらひて、とかく滯れる人は、心おぞくいふ甲斐なく思はるゝわざぞかし。

五　おのが物學び

おのれいときなかりし程より、書を讀むことをなん、萬よりも面白く思ひて讀みける。さるははかばかしく師に就きて、わざと學問すとにもあらず、何と心ざす事もなく、其のすぢと定めたる方もなくて、ただからのやまとのくさぐさの書を、有るに任せ得るに任せて、古き近きをもいはず、何くれと讀みける程に、十七八なりし程より、歌詠ままほしく思ふ心出で來て詠み始めけるを、それはた師に從ひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、唯獨り詠み

改觀抄　百人一首の註釋書
餘材抄　古今集の註釋書
勢語臆斷　伊勢物語の註釋書

出づるばかりなりき。集どもも古き近きこれかれと見て、かたの如く今の世の詠みざまなりき。斯くて二十餘りなりし程、學問しにとて京になん上りける。さるは十一のとし父に後れしに併せて、江戸に在りし家のなりはひをさへに失ひたりし程にて、母なりし人のおもむけにてくすしの業を習ひ、又その爲に、よのつねの儒學をもせんとてなりけり。

さて、京に在りし程に、百人一首の改觀抄を人に借りて見て、始めて契沖と云ひし人の說を知り、其の世に勝れたる程をも知りて、此の人の著したる物、餘材抄、勢語臆斷などを始め、其の外もつぎ〳〵に求め出でて見ける程に、總べて歌まなびの筋の善き惡しきけぢめをも、やう〳〵に辨へ覺りつ。さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは大方心に叶はず、其の歌の樣もをかしからず覺えけれど、

そのかみ同じ心なる友はなかりければ、唯世の人なみに、此處彼處の會などにも出で交らひつゝ、詠みありきけり。さて人の詠むふりは己が心には叶はざりけれども、己がたててよむふりは今の世のふりにも背かねば、人は咎めずぞ有りける。そはさるべき道理あり。別にいひてん。

さて後國に歸りたりし頃、江戸より上れりし人の、近き頃出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるにぞ、縣居大人の御名をも始めて知りける。斯くて其の書、初に一わたり見しには、更に思ひもかけぬ事のみにして、餘り事遠く異しきやうに覺えて、更に信ずる心はあらざりしかど、なほあるやうあるべしと思ひて、たち返り今一度見れば、稀々には實にさもやと覺ゆるふしぶしも出で來ければ、また立返り見るに、愈、げにと覺ゆること多くなりて、見る度に信ずる

冠辭考
枕詞の解釋書
縣居大人
賀茂眞淵

心の出で來つゝ、つひに古ぶりのこゝろことばの、まことに然ることをさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉のときごとはなほ未だしき事のみぞ多かりける。己が歌學びの有りしやう、大方かくの如くなりき。

さて又、道の學びは、先づ始より、神書といふすぢの物、古き近きこれやかれやと讀みつるを、二十許の程よりわきて志有りしかど、取立ててわざと學ぶ事はなかりしに、京に上りては、わざとも學ばんと、志は進みぬゝを、彼の契沖が歌書の說に擬へて皇國の古の意を思ふに、世に神道者といふ者の說く趣は、皆いたく違へりと、早く悟りぬれば、師と賴むべき、人もなかりし程に、我いかで古のまことのむねを考へ出でんと思ふ志深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへす讀み味はふ程に、いよ〳〵志深くなりつゝ、此の大人

田安殿
田安宗武

を慕ふ心、日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安殿の仰せ言を承り給ひて、此の伊勢の國より大和・山城など、こゝかしこと尋ね巡られし事のありし折、この松阪の里にも二日三日留り給へりしを、さる事露知らで、後に聞きていみじく口惜しかりしを、かへるさまにも又一夜宿り給へるを、うかがひ待ちていと〳〵嬉しく、急ぎ宿りに詣でて始めて見え奉りたりき。　さてつひに名簿を奉りて教をうけたまはる事にはなりたりき。

六　師の說

おのれ古典（いにしへぶみ）をとくに、師の說と違へること多く、師の說のわろき事あるをば、辨へ言ふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考の出で來らんには、必ずしも師の說に違ふとて、な憚りそとなん教へられし。　こはいと尊き教にて、わが師のよに勝れ給へる一つなり。　大方古を考ふる事、さらに一人二人の力もて、悉く明らめ盡くすべくもあらず、又よき人の說ならんからに、多くの中には誤もなどかなからん。　必ずわろきこともまじらではえあらず。その己が心には、今は古のこゝろ悉く明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたることも、思ひの外に、又人の異なるよき考も出で來るわざなり。　あまたの手を經るまに〳〵、さきさきの考の上を、なほよく考へ極むるからに、つぎ〳〵に精しくなりもて行くわざなれば、師の說なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。　よきあしきを言はず、ひたぶるに舊きを守るは學問の道にはいふかひなきわざなり。　又己が師などのわろきことをいひ

あらはすは、いとも畏くはあれど、それも言はざれば、世の學者その說にまどひて、長くよきを知ることなし。師の說なりとして、わろきを知りながら、言はずつゝみ隱して、よさまに繕ひをらんは、ただ師をのみ尊みて道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古のことの明らかならんことをむねと思ふが故に、私に師を尊むことわりのかけんことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしと謗らん人は謗りてよ。そはせんかたなし。われは人に謗られじ、よき人にならんとて、道を枉げ古の意を枉げて、さてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の心なればかへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

七　親の喪

唐土の國の、世々の物知り人どもの、親の喪に身のいみじくやつれたるを、孝心深き事にして記したるが數多ある中には、眞に心の悲しさはいとさばかりもあらざりけんを、食物をいたくへらしなどして、痩せさらぼひて、ことさらに顏容をやつしていみじげにうはべを見せたるが多かりげに見ゆるは、例のいと〳〵うる。さきわざなるを、いみじき事に褒めたるも又をこなり。失せにし親を、まことに思ふ心深くば、己が身をも、さばかりやつすべきものかは。身のやつれに病なども起りて、若し圖らず亡くなりなどもしたらんには、孝ある子といふべしやは。たとひさまでには至らずとも、しかいみじくやつれたらんをば、苦の下にも、親はさこそ心苦しく思

はめ。いかでか嬉しとは見ん。さる親の心をば思はで、ただ世の人目をのみつくろひて名を貪るは、何の善き事ならん。すべて孝行も何わざも、世にけやけきふるまひをして、いみじき事に思はするは、彼の國人の習にぞありける。

八　前後と說のかはる事

同じ人の說の、こゝとかしこと行違ひて、等しからざるは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かた其の人の說すべて浮きたる心地せらる。そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。始より終まで說の變れることなきは、なか〳〵にをかしからぬかたもあるぞかし、始に定めおきつる事の、程經て後に又異なるよき考の出來るは、常にある事なれば始と變れることあるこそよけれ。年を經て學問進み行けば、說は必ず變らでかなはず、又おのが始の誤を後に知りながらは、つゝみ隱さできよく改めたるもいとよき事なり。殊にわが古學の道は、近き程より開け初めつることなれば、速に悉くは考へ盡くすべきにあらず、人を經、年を經てこそ、次々に明らかにはなり行くべきわざなれば、一人のときごとの中にも、先なると異なることは、固よりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生の限りの程にも、つぎ〳〵明らかになり行くなり。さればその先のと後のとの中には、後の方をぞ其の人の定まれる說とはすべかりける。但し又みづからこそ始のをばわろしと思ひて改めつれ、又後に人の見るには、なほ始のかたよろしくて、後のはなか〳〵にわろきもなきにあらざれば、とにかくに、えらびは見ん人の心になん。

九　あやしき事

もし人といふもの今はなき世にて、神代にさる物ありきと記して、その人といひし物のありしやう、まづ上つ方に首といふ所ありて、その左右に耳といふもの有りて、もろ〳〵の聲をよく聞き、面の上つ方に目といふ物二つありて、萬の物の色形を、殘る隈なく見明らめ、その下に鼻といふものもありて、物の香をかぎ、又下に口といふ物ありて、奥より聲の出づるを唇を動かし舌を働かすまゝにその聲さまざまに變りて、詞となりて萬の事を言分け、又首の下の左右に手といふものありて、末に岐ありておよびといふ、此のおよびを働かして、萬のわざをなし、萬の物を造り出せり。又下つかたに足といふ物、これも二つありて、動かし運べば百重の山をも登り越えて、何處までも歩き行きつ。かくて又胸の内に隱れて、心といふ物のありつ。こはあるが中にもいとあやしき物にて、色も形もなきものから、上の件の耳の聲をきゝ、目の物を見、口の物言ひ、手足のはたらくも、皆此の心のしわざにてぞありける。さるに此の人といひし物、ある時いたくなやみて、やう〳〵に重りもてゆく程に、終にかの萬のしわざ皆やみて、いさゝか動くこともせずなりてやみにきと記したらん書を、儒者の見たらんには、例の信ぜずして、神代ならんからに、いづこのさるあやしき事かあるべき、すべてすべて理もなく、つたなき寓言にこそはあれとぞいはんかし。

一〇　歌と文

近き世の人の歌ども、文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目と

まることは程々にあまたあんめれど、それはたいかにぞや覺ゆる所は交りて、大方瑕なくとゝのひたるはをさ〳〵見えず。これを思へば、後の世にして古をまねぶことはいと〳〵難きわざになんありける。古の賢き人々のだに、これはしも露の瑕なしと覺ゆるは多かる中にも少くなんあれば、まして今の人のはいさゝかなる瑕をさへに言ひ立てんは、あながちなるにやあらん。されど、同じくは人のいさゝかも難ずべきふしまぜぬさまにこそはあらまほしけれ。よき程にて、心をやるをば、唐土のいにしへの人も、よからぬことに言ひ置きけるをや。

二　道のひめごと

いづれの道にも、其の大事とて世に廣く洩さず、祕めかくす事多し。

まことに其の道大事ならば、殊に世に廣くこそせまほしけれ。餘りに重くしてたやすく傳へざれば、狹くなりて絶え易きわざぞかし。そも濫りに廣くしぬれば、其の道輕々しくなることと言ふなるも、一わたりはことわりあるやうなれども、たとひ輕々しくなるかたはありとても、なほ世に廣まるこそはよけれ。廣ければ自ら重きかたはあるぞかし。いかに重々しければとても、狹くかすかならんは、よきことにあらず。まして絶えもせんには、何の言ふかひかあらん。されど近き世に、道々に祕傳・口訣などいふなるすぢ、多くは道を重くすといふは、ただ名のみにて、まことは人に知らざずて、己一人のものにして、世に誇らんとする私のきたなき心、又それよりも勝りてきたなき心なるぞ多かる。さる類も、もろ〳〵のはかなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるは

しくはかばかしき道には、さることあるべくもあらず。

二　學問はその道をえらぶべし

物まなびに心ざしたらんにはまづ師をよく選びて、その立てたるやう、敎のさまをよく考へて、從ひ初むべきわざなり。智（さとり）にぶき人は更にも言はず、固より智とき人と雖も、大方始に從ひ初めたる方に、おのづから心は引かるゝわざにて、その道のすぢわろけれど、わろきことをえさとらず、又後にはさとりながらも、年來の習はさすがに捨て難きわざなるに、我とかいふ禍神さへ立ちそひて、とにかくに强ひごとして、なほそのすぢを助けんとするほどに、終によきことは、えものせで、ひがごとのみして身を終ふる類など、世に多し。かゝる類の人は、勉めて深く學べば、學ぶまに〳〵、愈わろき事のみ盛りになりて、おのれ惑へるのみならず、世の人をさへに惑はすことぞかし。かへすがへす始より師をよく選ぶべきわざになん。

雨月物語（上田秋成）

菊花の約

青々たる春の柳、家園に種うることなかれ。交は輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすけれども、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交りやすくして、絶ゆること亦速なり。楊柳はいくたびか春に染むれども、輕薄の人は絶えて訪ふ日なし。

播磨の國加古の驛に、丈部（ハセベ）左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外はすべて調度の煩はしきを厭ふ。老母あり。

孟氏の操に讓らず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く。其の妹なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。この佐用が家は頗る富み榮えて有りけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢、事に託せて物を贈るといへども、「口腹の爲に人を累さんや。」とて、敢へて受くることなし。一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物語して、興ある時に、壁を隔てて人の苦しむ聲、いとも哀れに聞えければ、主に尋ぬるに、主答ふ。「これより西の國の人と見ゆるが、伴なひに後れしよしにて一宿を求めらるるに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、留め參らせしに、其の夜邪熱劇しく、起臥も自らはまかせられぬをいとほしさに、三日四日は過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出でて、心地惑ひ侍りぬ。」といふ。左門聞きて、「悲しき物語にこ

そ。主の心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人は、しるべなき旅の空に、此の疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。其のやうをも看ばや。」といふを、主止めて、「瘟病（ランビヤウ）は人を過つものと聞ゆるから、童部らもあへてかしこに行かしめず。立ちよりて身を害し給ふこと勿れ。」左門笑うていふ。「死生命あり、何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗の言葉にて吾が們（ともがら）はとらず。」とて、戸を推して入りつゝ、其の人を見るに、主が語りしに違はで、並の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黑く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、「湯一つ惠み給へ。」といふ。左門近くよりて、「士憂ひ給ふこと勿れ。必ず救ひ參らすべし。」とて、主と計りて、藥をえらみ、自ら方を案じ、自ら煮てあたへ、なほ粥をすゝめて病を看ること、同胞の如く、實に捨て難き有様なり。かの武士、左門が愛憐

の厚きに泪を流して、「かくまで漂客を惠み給ふ。死すとも御心に報い奉らん。」といふ。左門諫めて、「力なきことは、な聞えたまひそ。凡そ疫は日數あり。其の程を過ぎぬれば壽命をあやまたず。吾日々に詣でて仕へ參らすべし。」と實やかに約りつゝも、心を用ひて助けけるに、病漸う減じて心地清しく覺えければ、主にも懇に詞を盡くし左門が陰德を尊みて、其の生業をもたづね、己が身の上をも語りていふ。もと出雲の國松江の鄕に生長りて、赤穴宗右衞門といふ者なるが、纔に兵書の旨を明らめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師として物學び給ひしに、近江の佐々木氏綱に密の使に選ばれてかの館に留まるうち、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて大晦日の夜不慮に城を乘取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤・三刀屋を助けて、經久を亡し給へと勸むれども、氏綱は外勇にして、內怯えたる愚將なれば果さず。却りて吾を國に留む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて國に還る路に、此の疾に罹りて、思ひ懸けずも師を煩はしむるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾が半世の命をもて、必ず報い奉らん。」左門いふ「見る所を忍びざるは人たるものの心なるべければ、厚き詞を納むるに故なし。猶留まりていたはり給へ。」と、實ある詞を便にて、日頃經るまゝに、物みな平生に近くぞなりにける。此の日頃左門はよき友求めたりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろ〳〵語り出でて、問ひわきまふる心愚ならず。兵機のことわりはをさ〳〵しく聞えければ、一つとして相共に違ふ心もなく、かつめで、かつ喜びて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歲長じたれば、兄たるべき禮儀ををさ

めて、左門に向ひていふ。「吾父母に別れ參らせていとも久し。賢弟が老母は卽て吾が母なれば、新たに拜み奉らんことを願ふ。老母憐みてをさなき心を受け給はんや。」左門歡に堪へず、「母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信(マコト)ある言を告げなば、齡も延びなんに。」と、伴ひて家に歸る。老母喜び迎へて、「吾が子不才にて學ぶ所時にあはず、青雲の便を失ふ。願ふは捨てずして伯氏たる敎を施し給へ。」赤穴拜していふ。「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の惠愛(メグミ)を納むる、何の望かこれに過ぐべき。」と、喜びうれしみつゝ、又日來をとどまりける。

きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはてて、凉しき風による浪に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひて、「吾が近江を遁れ來りしも、雲州の樣子を見ん爲なれば、一たび下りてやがて歸り來り、「菽水の奴(ツブネ)に御恩をかへし奉るべし。今の別れを給へ。」といふ。左門いふ、「さあらばこのかみいつの時にか歸り給ふべき。」赤穴いふ、「月日は逝きやすし。おそくとも此の秋は過さじ。」左門いふ、「秋はいつの日を定めて待つべきや。願ふは約し給へ。」赤穴いふ、「重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。」左門いふ、「このかみ必ず此の日を誤りたまふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ち奉らん。」と互に情を盡くして赤穴は西に歸りけり。

荒玉の月日早く經ゆきて下枝の茱萸色づき、桓根の野ら菊艶やかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起き出でて、草の屋の席をはらひ、黃菊・白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊を傾けて酒飯の設をす。老母いふ、「かの八雲たつ國は山陰のはてにありて、こゝには百里を隔つると聞けば、けふとも定め難きに、其の來しを見ても物す

牛窓（備前國邑久郡の港）
小豆島（瀬戸内海の一小島）
室津（播磨國揖生郡の港）
魚の橋（播磨國印南郡阿彌陀村）

とも遅からじ。」左門いふ、「赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其の人を見てあわただしからんは、思はんことの恥づかし。」とて、美酒を沽ひ、鮮らけき魚を煮て厨に備ふ。

此の日や天晴れて、千里に雲の立居もなく、草枕旅ゆく人の群々語りゆくは、「けふは誰某がよき京入なる。此の度の商物によき徳とるべき祥（サカ）になん。」とて過ぐ。五十餘りの武士、二十餘りの同じ出立なる、「日和はかばかりよかりしものを。明石より船も求めなば、この朝びらきに、牛窓の門の泊は追ふべき。若き男はけく物怯（ものおびえ）して、錢多く費すことよ。」といふに、「殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふも、從（みども）に侍りしものの語りしを思へば、このほとりの渡は、必ず怯ゆべし。な憤りたまひそ。魚が橋の蕎麥（くろむぎ）振舞ひ申さんに。」と、いひ慰めて行く。口とる男の腹だたしげに、「此の死馬は眼をもはたけぬか。」と、荷鞍おし直して追ひもて行く。午時もやゝ傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心醉へるが如し。老母左門を呼びて、「人の心の秋には非ずとも、菊の色こきはけふのみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨に移行くとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌日の日を待つべし。」とあるに、否み難く、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出でて見れば、銀河消え〳〵に、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄み渡り、浦波の音ぞこゝもとに立ち來るやうなり。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんとするに、ただ看る朧なる黑影の中に人ありて、風のまにまに來るを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。踊り上る心地し

て「小弟蚤くより待ちて今に至りぬ。盟たがはで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせたまへ。」といふめれど、只點頭きて物をもいはでぞある。左門前に進みて、南の窓の下に迎へ、座につかしめ、「このかみ來り給ふことの遲かりしに、老母も待ちわびて翌こそと臥所に入らせたまふ。寤させ參らせん。」といへるを、赤穴又頭を振りて止めつゝ、更に物をもいはでぞある。左門いふ「既に夜をつぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れ給ふべし。幸に一杯を酌みて休ませ給へ。」とて、酒をあたゝめ、下物を列ねて勸むるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其の臭を嫌み避くるに似たり。左門いふ「井臼の力はたもてなすに足らざれども、己が心なり。卑しみ給ふ事勿れ。」赤穴猶答へもせで長き息をつきつゝ、暫ししていふ「賢弟が信あるあるじぶりを、などいなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ

實をもて告ぐるなり。必ずしも怪しみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず。きたなき靈のかりに形を見えつるなり。」左門大いに驚きて「このかみ何故にこの怪しきを語り出で給ふや。更に夢とも覺え侍らず。」赤穴いふ「賢弟と別れて國に下りしが、國人大方經久が勢に服きて、鹽冶の恩を顧みる者なし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。假りに其の詞を容れて、つら〳〵經久がなす所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練すといへども、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。此の約に違ふものならば、賢弟吾も何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈め

ども遁るゝ方なし。昔の人のいふ、人一日に千里をゆくこと能はず、魂よく一日に千里をもゆくと、此の理を思出でて自ら刃に伏し、今夜陰風に乘りてはるばる來り菊花の約につく。此の心を憐み給へ。」と言ひ終りて、泪わき出づるが如し。「今は永き別なり。只母公によくつかへ給へ。」とて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。左門あわてとどめんとすれば、陰風に眼くらみて行方を知らず。俯伏につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大に哭く。老母目さめ、驚き立ちて、左門がある所を見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に臥倒れたるを、忙はしく扶け起して、いかにと問へども、只聲を呑みて泣く〳〵さらに言なし。老母問うていふ。「兄赤穴が約にたがふをうらむとならば、明日なんもし來るには言なからんものを、汝かくまでをさなくも愚なるか。」と強く諫むるに、左門稍答へていふ「このかみ今夜菊花の約にわざわざ來る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ。しかじかのやうにて約に背くが故に、自ら刃に伏して、陰魂百里を來るといひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眼をも驚かし奉れ。只只赦し給へ。」と潸然と哭入るを、老母いふ「牢裏に繫がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴するものは夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん。よく心を靜むべし。」とあれども、左門頭を搖りて「實に夢の正なきにあらず。このかみはこゝもとにこそありつれ。」と、又聲を擧げて哭き倒る。老母も今は疑はず、相叫びて其の夜は哭きあかしぬ。明くる日左門母を拜していふ「吾幼きより身を翰墨に寄すると雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信を盡くすこと能はず。徒に天地の間に生るゝのみ。このかみ赤穴は一生を信

義の爲に終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。君御身を保ち給うて、暫くの暇を給ふべし。」老母いふ、「吾兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く留まりてけふを久しき日となすこと勿れ。」左門いふ、「生は浮きたる漚の如く、朝に夕に定め難くとも、やがて歸り參るべし。」とて、泪を振うて家を出で、佐用氏にゆきて、老母の介抱を懇にあつらへ、出雲の國にまゐる路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば、夢にも哭き明しつゝ、十日を經て富田の大城に到りぬ。先づ赤穴丹治が宅にゆきて姓名をもていひ入るゝに、丹治迎へ請じて、「翼ある物の告ぐるにあらで、いかで知らせ給ふべき。謂なし。」と頻りに問ひもとむ。左門いふ、「士たる者は富貴消息の事、共に論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衞門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報いすとて、日夜を追うて、こゝに下りしなり。わが學ぶ所について士に尋ね參らすべき旨あり。願ふは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀に臥したるに、魏王自らまうでて、手をとりつゝ告ぐるは、『若し諱むべからずの事あらば、誰をして社稷を守らしめんや。』とあるに、叔座いふ、『商鞅年少しと雖も奇才あり。王もしこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すこと勿れ。他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべし。』と懇に敎へて、又商鞅を私に招き、『吾汝を勸むれども王許さざる色あれば、用ひずば反りて汝を害し給へと敎ふ。是君を先にし臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて害を免るべし。』といへり。この事士と宗右衞門にたぐへてはいかに。」丹治只頭を低れて言なし。左門座を進みて、「伯氏宗右衞門、鹽冶が舊交

公叔座　戰國時代、魏の惠王の時の相。
商鞅　衞の人。魏の公叔座に仕へた。

を思ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨てて、尼子に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある極みなり。士は今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此の横死をなさしむるは友とする信なし。經久强ひて留め給ふとも、舊しき交を思はば、私に商鞅・叔座が信を盡くすべきに、只榮利にのみ走りて、士家の風なきは卽ち尼子の家風なるべし。さるから、このかみ何故この國に足を留むべき。吾今信義を重んじて、態〻こゝに來る。汝は又不義のために汚名を遺せ。」とて、いひも終らず、拔打に切りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立ち騷ぐ間に、はやく逃れ出でて跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡をも强ひて追はせざるとなり。あゝ、輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。

故伊豫守
越前福井の藩
祖松平忠昌

駿臺雜話（室鳩巢）

一　杉田壹岐

寛永の頃、越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふ者あり。もとは足輕なりしが、其の身の材をもて、微賤より登庸せられ、厚祿をうけ、國老に列しけり。伊豫守殿參覲にて、一年在江戸の内、費用過分なりしを、常に前年より支度して、用度足るやうにしけるは、ひとへに壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に顏を犯して直言して、君の過を匡救する事を忘れず。

ある時、伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及びて歸城あり。家老どもいづれも出迎へしに、伊豫守事の外氣色よろしく、家老どもに對

して、「今日若者どものはたらき、いつに勝れてぞ見えし。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にも立つべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りて、いづれも喜び候へ。」とありしかば、家老どもいづれも、「御家のため、何よりめでたき御事にて候。」といひしに、壹岐一人末座にありけるが、默々として居たりしを、何とぞいふかと暫く見合せられしが、こらへかねられ、「壹岐は何と思ふ。」とありしに、其の時壹岐、「只今の御意承り候に、憚りながら歎かしき御事に存じ候。當時士ども御鷹野などの御供に出で候とては、さきにて御手討になり候はんも計り難く候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。かやうに、上を疎み候うて思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべきとは存ぜられず候。それを御存知なく賴もしく思召さるゝとの御意こそ、愚なる御事にて候へ。」といひしかば伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀持ちて側に居たりしが、壹岐に「座を立ち候へ。」といひしを、壹岐聞きて、其の人をはたとにらみ、「何れもは、御鷹野の御供して猪・猿を逐うてかけ廻るを御奉公とす。此の壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な。」とて、其のまゝ脇指を拔いて後へ投げ棄て、伊豫守殿の側へ進みより、「ただ御手討に遊ばされ下され候へ。空しくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はば、せめて御恩の報じ奉る志のしるしと存じ候はん。」といひて、頭をのべ平伏しけるを見給ひて、なにともいはで奥へいられけり。

其のあとにて、外の家老ども壹岐に對ひて、「御爲を思ひて申されしは尤もにて候へども、折もあるべき事にて候。今日、御鷹野より御

機嫌にて御歸りありしに、御氣さきを折られ候事は、遠慮もあるべき事にこそ。」といひしを、壹岐「君へ諫を申上候に、御機嫌を考へ候ひてはよき折とてはなきものにて候。今日はよき序とこそ存じ候へ。其の上某事は、御取立の者にて候へば、各〻とは譯の違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても、其の分の事にて候。」といひければ、諸家老各〻感じあひける。

さて家に歸りつゝ、切腹の用意して、君命の下るを待ちけるが、日ごろ糟糠の妻のありけるに對うて、「其の許に言ひ置く事ただ一つ侍り。御身は女の身なれば、直に御恩を受けたるにてはなけれども、我が御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歴々の妻として大勢の所從に圍繞せられしは、限りなき御恩にあらずや。しかれば、われ生害仰付けらるゝ後にても、ただ朝夕、今まで御恩の有りがたかりし事を忘れずしてかりにも上を怨み奉る心あるべからず。もし女心として、我が身のものうきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を、言葉の末にもつゆおきなば、黄泉の下までも深く怨と思ふべし。」といひけり。

さて今やと待ちけるに、夜ふくる程に人來て門を叩きしが、「召あるまゝ登城すべし。」となり。さてこそと思ひて登城しけるに、すぐに寢所へめし入れ、「其方が畫言ひし事、心にかゝりて寢られぬ間、夜陰なれども呼びつるなり。わが誤りたる事は、とかく言ふに及ばず。其方が志を深く感じ思うて滿足する。」との事にて、直に腰の物を賜はりしかば、壹岐も思ひ寄らぬ事にて、覺えず落涙に咽びつゝ、拜賜して罷り出でけるとぞ。

李白
唐代の詩人

二　月は世々の形見

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、荻吹く風も身にしむ頃なり。久しく翁のがり行かねば、此のほどの老の寢覺も覺束なし。いざたづね問はんとて、ある夕暮に例の人々打ちつれて來しが、又もまゐらんとて、歸らんとせしを、翁とどめて、「今宵は月もよし、薄酒すゝめ奉らん。しひて留まり給へ。」といへば、翁の心をいかでそむくべき。「さあらば。」とて、各、座をしめて清談の露やうやう繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるじまうけし、さかな取りそへて盃出しけり。諸客皆醉ひて興に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて、「青天有月來幾時。我今停盃一問之。」と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、又二人脇よりつけて、「人攀明月不可得。月行却與人相隨。」とうたふ。又外の人々迭に唱和して其の次を、「皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。」と謠ふ。又其の次を、「但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白兎搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰鄰。」と謠ふ。其の次よりは翁も助音して、「今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。」とうたひをさめけり。其の後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。さて翁いふやう、「大方は月をもめでじ。」とは詠みたれども、老の心も月見るにぞ慰み侍る。されどそれにつきて、千載無窮の感も起りぬれば、うべ月を人の老となるともいふべかめり。但し月を見るにいろ〳〵あり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくづくと見て、「月は

大方は云々
大方は月をもめでじ、これぞ、この積れば人の老となるもの（古今集）

徑いく尺かあるべき。各、考へて見給へ。」といふ。また同じやうの人かたへより、あれは物の切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらん。」とて、互に僉議しけるを、聞く人々、皆舌をくひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり、影の清きにめでて、良夜とてただ打寄り物喰ひ酒飲みなどして、歌ひのゝしるを樂とするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。又騒人・墨客の月を詠めて、字ごとに金玉を雕り、句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其もただ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人を慕ひて、其の書を讀み其の心を知りつゝ、常に世を經たる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照らし來て、今にあれば、古人の形見ともいふべし。さればに月に對して昔を忍びては、さながら

杜甫　支那唐代の詩人。

楚辭　楚の屈原の作

屈子　屈原のこと。

古人の面影もうつるやうに覺え、月はものいはねども、語るやうにもおぼえ、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすてて、一氣に古今を洞觀して、「青天有月來幾時。」といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。昔より李・杜とて、杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。然れども、李白が詩も、古今流水のごときを感ずるまでにて、後代を待つの心は見えず。翁むかし楚辭をよみて、「往者余弗及。來者吾不聞。」といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ感にたへずなんおぼえき。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語らうてとおもへど、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめとおもへど

其の人をきかねば誰とかしらんとぞ。是なん屈子に限らず、古今心ある際は、大かた此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにやいとど感深く覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、何れの代にか又わが如く月に對して今を忍ぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照らすらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましとおもひ侍る。そのこゝろを、

月見れば末の代までも忍ばれて
見ぬいにしへのいとどゆかしき。

こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず。

三　壬子試筆の詞

白駒の隙　人生ニ於テ天地之間ニ、如ニ白駒之過ヲ隙ニ。（莊子）

董生を學ぶ　下ル帷發ル憤讀レ書、三年不レ窺レ園（漢書董仲舒傳）

日月迭に移りて、白駒の隙過ぎ易く、衰病日に侵して、黃金の術成り難し。されば犬馬の齡是までなるべしとも思はざりしが、何時しか老の波寄り來て、今年は七十餘り五つの春にもなりぬ。あまさへ、近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまま、昔の董生を學ぶとにはあらねども、この三とせ春の園を窺ふ事もかなはねば、閨の中ながら、梢に傳ふ鶯の音に殘の夢をさまし、枕に薫る梅が香に過ぎし昔をしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學びの窓に年を經る甲斐ありて程朱の道に從ひて鄒魯の風をたづね、韓歐が文を好みて邯鄲の步を學ぶにぞ、老の寐覺も慰みぬべき。さても多くの年月を經て、世の

富貴は浮べる雲　不義而富且貴於レ我如二浮雲一（論語）

禍福は糾へる繩　禍之與レ福。何異二糾繩一。（賈誼鵩鳥賦）

蚍蜉の樹を撼かし　蚍蜉動二大樹一可レ笑二自不レ量（韓退之。詩句）

精衞が海を塡むる　發鳩之山有レ鳥、曰二精衞一（中略）取二西山之木石一。以塡二東海一。（山海經）

移りかはる有様を考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはん、現とやいはん。誠に「富貴は浮べる雲の如し。」と言へるに何か違ふ事あるべき。中にただわが聖人のたて給へる三綱五常の道のみ、天地と竝び傳へ、古今のへだてなく、是ばかりは變る事あるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきは此の道ぞかし。然れども儒教世に行はれざりしより、人々義理に疎く、利欲にさとくなる程に、五常の道廢れて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、偏に蚍蜉の樹を撼かし、精衞が海を塡むるに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも、吾が儒分内の事なれば、これを度外に置くべきにもあらず。又世に老師・宿儒と稱する人の好んで異說を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をば餘處にするこそうけられね。ただ務めて新奇を競ひて、俗耳を悅ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人のいはゆる阿世曲學とは、これ等を謂ふなるべし。

よし人はさもあらばあれ、たとひ風俗は昔にあらずなりぬとも、我が身一つはもとの如く仁義の道を守りつゝ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりししるしともいふべけれ。されば荒玉の春の初とて、人は皆己が志、身の福を萬づ代と祝ふ中に、我は唯五常の道に心を寄せて、何時も變らずめでたきものは斯の道なりとて、かくなん筆を試むるならし。

この春もかはらで行かむ七十路に
あまる五つの道をたづねて。

國文新副讀本 下卷終

大正十三年四月二十八日印刷
大正十三年五月一日發行
大正十四年十一月十五日訂正再版印刷
大正十四年十一月十八日訂正再版發行

國文新副讀本

定價	
上卷	金參拾錢
中卷	金參拾四錢
下卷	金參拾五錢

昭和五年度臨時

定價	
上卷	金四拾九錢
中卷	金五拾五錢
下卷	金五拾七錢

編者 藤村作
編者 島津久基
發行者 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤正叟
印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁
(三協印刷株式會社印刷)

發行所 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 至文堂
振替口座東京二九五〇七番
電話青山(長)三五四六番 四三四三番

許可不出售 中等教科書協會製

弊堂發行の教科書は供給差支無き樣常に澤山製本準備致居候間若し各地書店に品切れ等にて御差支有之候節は何卒弊堂へ直接御注文被下度直に送本可申上候